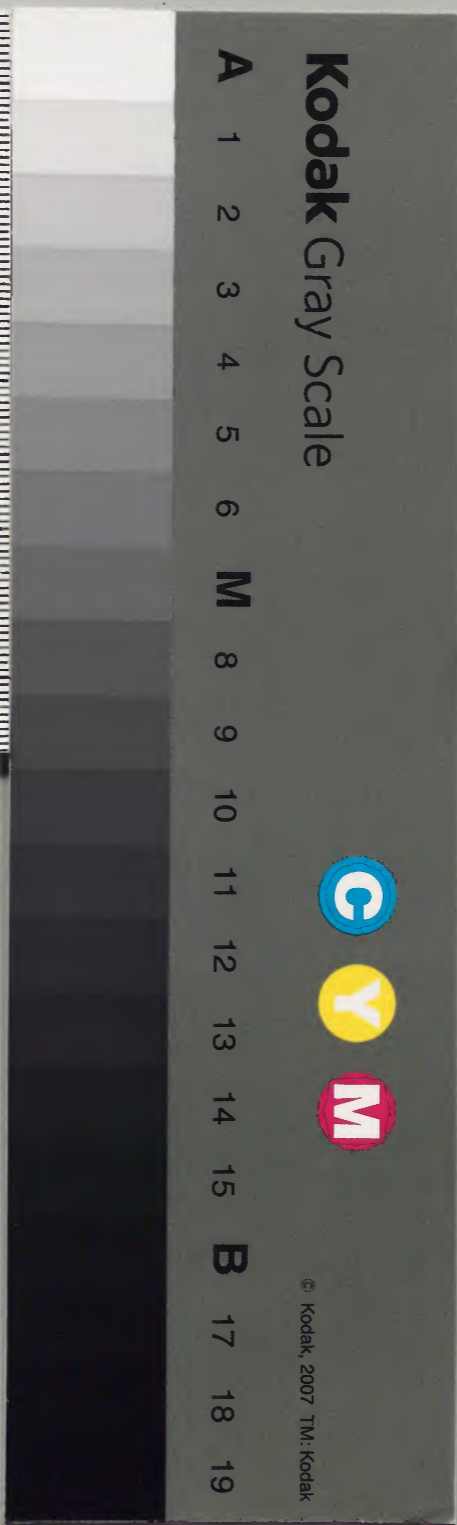


日本書紀傳 十卷 八止

二五

和書
一〇五二二號

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156 (34)		
函號	特	85	1



教部省
文庫印

清
文庫印

文庫
高野

内一六八三號

別有る事あるを文字たれ同トけり何所もこも
 同ト訓るハ唯古字ハ耳依て古言を思ハぬ故あり
 同ト字を書けども其状ハ依て古言ハ異なる事を思ふ
 可一又波都古と云訓も有れど詳ある證を見ずと有
 り姓氏録ハ多く其之後也と書せり子孫の事能知とも云
 へ一但末ハ本の對以後ハ初の對あり然るハ子孫ハ
 ハ末とも後とも云るを先祖ハ本と云ハ初と云ず
 一祖と云遠祖と云て唯本とも初とも云ず但紀中ハ
 多く本祖始祖と云稱ハ有あり裔字を波都古と云證
 とも保登利とも波都年麻古とも波都古とも訓た
 る波都ハ端の意ハて遠ハ末ある意ある是證あり

○日本書紀傳十

○四百四十八

然サテノキニ後アテヒタキヒタリノ洗ミメラ左コレニヨリテ眼ナリマセルカミノ因ミナラ以マラス生マラス神マラス號マラス曰マラス
 天アマ照テラス太オホミ神カミトノ復マタ洗アタタキキミギヲノミメテ右コレニヨリテ眼ナリマセル因コレニヨリテ以コレニヨリテ生ナリマセル
 神カミノ號ミナラ曰ツク月ヨミノ讀ミコトノ尊マタ復アタタキキミギヲノミメテ洗ミナラ鼻コレニヨリテ因コレニヨリテ以コレニヨリテ
 生ナリマセルカミノ神ミナラ號マラス曰ス素カノ戔ラノ鳴ミコトノ尊アハセテラヒミナラノカミ凡ミコトノ三ミコトノ神ミコトノ
 矣マセリ已ステニ而シテ伊イ特ガ諾ナギノ尊ミコト勅コトヨサシテ任ミンシラノ三ミコト子ミコト

曰ノリタカク天アマ照テラス太オホミ神カミ者ハ可ベキ以ミラス治タカ高マノ天ミラス
 原ハラ也ナリ月ツク讀ヨミノ尊ミコト者ハ可ベキ以ミラス治アラ滄ウナ海ミラス
 原ハラ潮シホ之ノ八ヤ百オ重ヘラ也ナリ素ス戔カノ鳴ラノ尊ミコト
 者ハ可ベキ以ミラス治アメノ天ミタラ下タマヒキ也コノ是トキ時ス素サノ戔サノ
 鳴ラノ尊ミコト年ミト已シ長ステ矣オイ復タリ生マタ八オヒタリキ握ヤ鬚ツカ鬚ヒ

〇日本書紀傳十
 〇四百四十九

髯ゲ雖然ドモ不治ニカレ天下サズラ常以ミテ啼泣アメノミタラ
 恚恨フヅクミタマフカレ故伊弉諾イ尊問ナギノミコト之曰トヒ汝ハク
 何故ナニトカセ恒啼ツネニナクサト如此ク耶對トコトハハ曰ミタマシク吾欲アハオモフカヒ
 從母シカヒマツル於根國ハノミコトノ唯為ネノクニ泣耳タビナクノミトマラミタマヒヨサトイ伊弉カ
 諾尊ナギノミコト惡之ニクミテ曰ノリタマハク可以ネトノリタマヒ任情マヨヒ行矣ココロノ
キ

乃逐之

スナハナヤラヒタマフ
 此段ハ古事記ヨ也於是洗左御目時所成神名天照太
 御神次洗右御目時所成神名月讀命次洗御鼻時所成
 神名建速須佐之男命ト有ト同ト傳メ次ト右件八
 十福津日神以下速須佐之男命以前十四柱神者因御御
 身所生者也ト終メたス如ク御身降の時一列ノ神
 あり趣ありの已傳ハ二十ト註ト初又上三百七
 論ハ如ク決メて正書ノ傳メ方正ト有テ此ト第
 二書ト伊弉諾尊云乃以左手持白銅鏡則有化生

之神是謂大日靈尊右手持白銅鏡則有化生之神是謂
月弓尊又迴首顧眄之間則有化神是謂素戔嗚尊也
又二何れより混ひたる傳ある事灼然一其八第
十一書十八入水云々出水云々又八吹生赤土命出吹
生大地海原之諸神と有て此三神の無^實小正説
て此時の生坐る神ハ^{童男命}少童神其限^小所見たりけ
然るハ然計の珍子を大地海原之諸神と有る中ハ被
入へくも非^ハ決めて黄泉の傳又被除の傳と如此
く備ハ^ハ猶此三神の生坐る古説ハ正書^ハの如く
陰陽二神の宇宙を御す可き御子として生奉る世給

へる由の傳ありし事を知ハ^ハ此を以て正書^ハ其第
十一書を以て正説^ハ云あり又長寛勘文ハ初天地
比古命又右肩忍奈豆流時或出未^ハ神名野大御神加
夫里支谷久志弥居怒命自髻中成出未^ハ神名須佐之
命三柱大王等是也と有^ハ古き傳ありて右ハ三
神を被除の時ハ成坐る神と爲^ハあり再轉りて日神
月神の御名を失^ハ又熊野大御神と申すハ其須佐
之男命ハ坐る別神の如く思誤り又此も古事記も亦
合ぶる事ハ此ハ素戔嗚尊不治天下常以啼泣云々
吾^後後女於根国唯為泣耳と所見たりも先ハ黄泉ハ罷
坐^ハ伊弉册尊を御女神とも申すま^ハま^ハ非れと
も眼前ハ御在^ハ坐す御父神を除て見も知ぬ御女神

を戀慕ひ奉りて給ふと云ふ謂ひは無し事あり古事
記にも僕者欲罷^此國根之堅洲國と有も同ト状ありて
上下の相應ハざるハ既く二神の共ハ相生坐り一本
傳の亡て一傳の方の遺れるあり然所思ゆる由ハ海
神等水門神等ハ被除ハ依て成坐^{二神の生給ふ列}神あるハ上ハ出
て古事記も同ト状あり然ハ此三神の生坐一御事
ありとも其並ハ上ハ在つゝのども略^此きて其一傳の方
を本説と思信^レて載たる故ハ右の如く前後打合
る事も出来ぬたれども今ハ中ハ吾^欲從母於撰國と
有り却りて其亡たる本傳を探得べき事着^レハ成ハ

たる斯ハ此も古事記も共ハ元ハ正書^レの如く二神
の生坐一傳あり一を後ハ撰ハ落^レさ^レたる者^レハ
所見^レたりける記傳^七ハ此國^ハ伊邪那美命を
ハ伊邪那大神の御禊^ハを成坐^ハ伊邪那美命を
ハ彼御禊^ハ成坐^ハ神等ハ元を尋^ハ皆伊邪那美命
ハ黃泉の穢惡^ハを以て起^ル御母^ハ爲^ル其時^ハ四柱神等
御禊^ハ清善^ハの父^ハ母^ハの如^クと云^フ其説^ハ一傳^ハ
あ^レる古人も尤^ク思^フ誤^リ傳^ハへたる者^ハ云^フ事^ハ近^ク考
結^ハ故^ハあり故^ハ其時^ハ成坐^ハ神等^ハ伊邪那尊^ハの御
子^ハ申^ス事^ハ見^エて彼底箇男中箇男表箇^三神
を一柱^ハ合^セ申^ス名^ハ鹽土老翁^ハ申^ス由^ハ上^ハ三^ハ百^ハ九^ハ
十^ハ七^ハ丁

○日本書紀傳十

○四百五十二

註るが如くを天孫降臨章第四一書は是伊弉
諾尊之子也と有り若此珍子神等の此被除は就成
坐るるむの素戔鳴尊の吾欲後母於根国女神を指す
母と申給ふより者ありを又神功皇后御紀に
御名葉共の中は住吉神に限りて於日向国播小門
之水底所底而水葉雄之出居神にむけく宣給へるを
以ても其珍子神等ハ大御身滌み成坐る神ありぬ事
を明しめ曉る可し同時の御名葉坐る撞賢木嚴之御
屋大人説は撞ハ借字にて尙賢木と云事ハ伊豆と
云む矣語ある由云れは然る意ハ非事已
小上ハ註るが如くおれは此を以て其大御身滌み時
小日大神の成坐りて云ふ微ハ成難きを思ふ可し

然水ハ此ハ何より混み来りて云ハ天日ハ向ハ
せ給ひて左右の御眼ハ洗ハせ給ひ御心の清く
成給ひける即日神の荒魂神和魂神の生坐り古傳の
有つるが混水雜りて上ハ乃興言曰上瀬是太疾
下瀬是太弱便濯之中瀬也と有る其時ハ先左右の御
眼ハ洗ハせ給へるわが有ける此ハ然後洗左眼云ハ
と有ハ日神月神の成坐る出自と爲る故ハ然後ハ
云あれども此御眼を洗ハせ給へり事ハ限りて最
前ハ必先有し事疑ハ所無し證有の上文ハ伊弉諾尊
既還乃追悔之曰吾前到於不須也凶目汚穢之處と見

所見たる凶目ハ已百六十註せる如く黄泉國の穢
き狀貌を見給ひつるを然宜へるめて御目ハ見行
て事を殊小惡ませ給へる故ハ何處ハ有れ先御眼
を洗ハせ給ふ可く続きて御鼻を洗ハせ給ふ可く次
小ハ其汚穢ハ觸させ給へる惣ての御身を滌き洗ハ
せ給ふ可き理ありハ海底潮中潮上ハ沈ミ潛き浮び
て濯かせ給ふ至てハ遺る所無く清まり竟させ給
ふ可き事ありハ此第六一書ハ右の阿曇連等所祭神
矣と云道を終めめて此文を外あり統合する爲小然
後と云聯ぬたる者ありハ此所を界めて中古より寄

せ合せたる傳ある事著明き者あり古事記も此
有れども然後云ず於是と有れども上を承て下
を起す爲ハ云々ありハ同トく共ハ傳あり事云も
更あり傳其正き傳説ハ上三百七十粗云る如く常
ハ信用ウケヒ難き書共ありども神宮の古傳ハ遺れる者
あり御鎮座本縁ハ荒祭宮一座天照皇太神荒魂亦稱
荒魂神之時是八十柱津日神大柱津日神也伊弉諾尊
到筑紫日向ハ戸橋之摠原而被除之時洗左目以生日
天子大日靈貴天下化生名曰天照太神荒魂荒祭神是
也謂被戸神者瀨織津比咩是也又有る是其左眼を洗
給ひ一時ハ成坐る神の正説めて傳記次第記共ハ異

同有る事無し然れども生日天子は日靈^貴演^貴て有る心
有て外宮神人の加へたる文ありて其ハ次ある和魂神
小月天子と云て強て豊受大神を天御中主神と一國
常立神と一水徳神と一其ハ就て月天子と爲む爲小
設たる私説ありハ其生日天子の四字を削去て見る
時ハ大日靈貴尊の天下ハ化生^{アノミ}し御魂を荒祭神と云
義ハ成て日神の天下ハ幸給ふ荒魂和魂神等の神^初と
生坐る傳ふ成^レ甚^ク美た^ク聞ゆるをや其委しき事
荒魂和魂條又速佐御良比咩神の傳ふ註せるを見
曉^ル可^ク此^レ五部書と云物ハ外宮神人共の作^ルて強
て豊受大神を皇太神ありも貴き神と爲むと巧^ク物
爲たる書ハ有れども然す^ルハ古き物ある^ル今

世ハ絶た^ル古書の遺文を見る事亦少^ク者^クハ
斯^クハ狭^ク固陋^ナあり眼を洗去^リ公平^ニ此^レを見る時^ハ
此^レ彼^レ見^ル内^ノり^ハ又同書ハ多賀宮一座天照皇太神和
魂伊弉諾尊到筑紫日向小戸橋之檉原而祓除之時復
洗^ハ右目以生日天子亦天下化生名曰天照大神之和魂
也被戸神伊吹戸主神是天照皇太神第一攝神荒祭宮
多賀宮是也と有る此生日天子の四字を削去て右眼
を洗給ひて成坐^リ神の正説あり下ハ荒祭宮多賀宮
是也と有^ル上^ニある荒祭神と此神とを合せて白王太神
の第一攝神と云^ハ結^スあり^テ故^{アリ}上代本記依天照
太神御託宣第一攝神多賀宮奉傍止由氣宮也と有る

下りも伊弉諾尊洗右眼因以生名号伊吹户主神即太
神分身坐故亦名曰太神和魂也之有り但太神和魂也
を本今唯荒魂也之有れども荒ハ決ク和字有る事
著けりハ上ハ引る例ハ准ひて改め引つ然るハ倭姫
命世記も伊弉那伎神所生神名伊吹戸主又名曰神
近日大直日神是也之所見たる如く正實ハ直日神ハ
坐す者を荒魂と申す可き謂無き事あり
諸右の傳を傳記ハ多賀宮一座止由氣皇大神荒魂
也之復洗右眼因以生日天子御中主靈貴也天下
化之此名曰止由氣大神之荒魂多賀宮是也有て次
記も此と同し由氣大神未ハ亦曰伊吹戸主神是也
賀宮ハ右の如く皇大神の和魂宮ハ坐する儀式儀
坐す者を荒魂と申す可き謂無き事あり

及太神宮式ハ豊受太神荒魂之有ハ由有る事あり此
ハ上ハ巳ハ荒魂和魂之傳ハ云ハ如く皇大神和魂
宮ハ豊受大神の荒魂を被祭ルハ少謂ゆる荒魂和魂
魂ハ心一ハ大神の大神社注進狀ハ見えたる如き御
契の有て其縁の事ハ非御有る諸凶目き物を見行
狀ありハ其説を見て知べし
坐し御眼を洗ハせ給へる其ハ垂てハ彼汚穢ハ醜國
の臭氣の御鼻ハ入たるを先濯キ洗ハせ給ふ可し其
最後ハ至る迄豈待せさせ御在し坐む此も亦最初ハ
在つゝハ事中ハ更あり其正説ハ右の本縁ハ亦後
除之時洗鼻以生神号佐須良比賣神土藏靈貴也素戔
鳴尊共合力座給と有て傳記も亦此ハ同トキ其委
トイ傳ハ上三百七十四丁ハ引る尾崎神社記ハ伊弉諾尊到

到筑紫日向小戸橋之檉原而被除之時洗鼻因以生神
号速佐須良比賣神土藏靈貴也素戔嗚尊合力坐給之
是即素戔嗚尊和魂而分身御子也之所見たる是あり
上引る上代本記にて多賀宮の御事を大神分身坐
と有る此と同ト本大御體より荒魂和魂と御身の
分り坐て各神と成給へるあり此事を以て天照太
神素戔嗚尊あどの既成坐て御在し非ず分
身と云べき事の有べし給へるを思ひて已く陰陽如
二神の共為夫婦して生奉るを給へるを曉る可し如
是記し畢て皇太神宮儀式帳を見るに其最初此
樹畏天照坐太神明詠之神二柱所稱伊弉諾尊伊弉冉
尊共為夫婦合所生神之所見たる上ハ神宮傳ふる
所も正書の説の如く陰陽二神の共小合生坐る傳ふ

△実小皇祖天神
の詔命を奉て天
降来坐て國土万
物を生成坐る二
柱御祖神等小坐
せ其國土万物の
君坐り坐す御子神
等を生奉る給へ
ざる以前神の已
く神遊せ給へ
る後小男神柱し
て成給ふ事あり
ハ決小無事あり
るを思ふ可し者
あり

上ハ此一書又古事記の如く此大神等の御身浴小
目成坐り云説ハ固より非ずして右の如く外宮
の書共小遺りる事ハ有れども皇太神の荒魂和魂
と素戔嗚尊の和魂の三柱其御眼御鼻を洗はせ給
ひ一時小成坐ると云傳ありし事合せて此を曉り
る者あり是を以て神宮の古傳を以て正しき説と
ハ思定めてあむ有ける神名帳頭註但馬国朝来郡粟
伊弉諾伊弉冉相生之兒大日靈神月讀素戔嗚合三神
和銅元年歲次戊申八月十三日筆取神部八島勘註言
上々有る相生之兒云ハ古くより天下の人共
信三居一説ありを知へく又傳九卷五十八下小説
如く出雲神賀詞小素戔嗚尊を伊弉(弟)謝那伎乃日眞名
子と有る鎮火祭詞小神伊佐奈伎伊佐奈美乃牟妹妹

○日本書紀傳十

○四百五十七

二程嫁継給^白云^{麻奈}第^子火^結神^生給^白と有^る
麻奈子^何れ^も痛^妻の^生たる^子か^限りて^云ふ^古言^の
相生^給へ^る事^著明^クり^あむ^但月^読尊^素鳴^尊同^の
神^{ある}事^ハ何^レ○然^後洗^左眼^云復^洗右^眼云^右
處^違ハ^ず○然^後洗^左眼^云復^洗右^眼云^右
ハ註^ス如^ク天^照太^神の^荒魂^枉津^日神^和魂^直日^神の
因^テ成^坐る^出自^ナり^ト雖^モ此^ハ然^後と^有ハ^誤ハ^テ
必^上有^る其^神等^の御^名の^所在^テ御^身條^の最^初ハ
在^ツる^事有^るあり^其故^ハ彼^凶目^汚穢^キ處^ハ到^坐し
御^事故^ハ第^一ハ^ハ其^見行^し御^眼を^洗ハ^セ給^ふ可^ク
ク次^ハハ^其臭^氣の^受入^給ひ^し御^鼻を^洗ハ^セ給^ひ然^後
後^ハ御^身の^汚垢^ハ濯^ガセ^給ふ^可ク^ハ此^ハ在

へま文ありざる事を曉可し御禊ハ御身を濯かせ
給ふ云内ハ第十一書ハ但親見泉国此既不祥
致欲濯除其穢惡有て日ハ親しく汚穢ハハキ物を
見行し事を尤も忌惡おせ給ひて其御眼を洗ハセ
給ふ事を主と爲させ給へるあれハ何よりハ先立て
物為させ給ふ可き御事あるを思ふ可し古事記ハも
是以伊邪那岐大神詔吾者到於伊那志許未志許米岐
織国而在祁理故吾者爲御身之禊而云々此と同ト
状ハ宣へるあり御眼ハ汚穢キ處を見行し御在し坐
し事を深く御心ハ係させ給へるハ故あり凡て人の
身を觸る

ふりも眼に見る事いしも深心小深入て難本さ者
あり神の御上にて猶更然るると思像奉らる
ず御事あり今も人の御洗ひ顔も手をも濯ぐ次第
あるを考然るハ御眼を洗ハせ給ふハ御心を清め
合せ給へる御所為と所思えたり然るハ神武天皇御
紀小大醜此云鞆奈弥你句と註せるハ醜めき物を見
てハ心小悪きを生ずを云ハ古事記同段ハ阿佐米余
玖と云ふ語の有ハ可美物を目不見てハ心小善する
を云て心の善くも悪くも清くも汚穢くも成る事
ハ皆其眼に見たる事ハ心小移るか故あり所以ハ彼
穢固を見行ハ坐ハ御眼を洗ハせ給へる其御快よさ

の感け小憑て天日より其御靈の降坐て皇太神の荒
魂和魂神ハ生出給へる小なる有ける故思ふハ此御
亦神と氣と形を清むる有けり其御眼を洗ハせ
給ふハ右ハ云る如く御心を清め給へる即
神を清め給ふハ洗鼻者ハ穢氣時世と有る如く此ハ氣を清
ハハ訣ハ洗鼻者ハ穢氣時世と有る如く此ハ氣を清
むるありハ御身を洗ハせ給へる趣あり然れども此ハ
形とハ就ハ御後除し給へる趣あり然れども此ハ
就ハ心法ハ事あり論め云ハ鏡屋大人も己ハ云れ
たりハ如く外国の心控めて云ハ足さる事あり
眼を米と云ハ其より浩うトて麻奈古と云ハ日之心
の義あり其用を見流と云ハ就ハ考ふハ米ハ聚の意
小て如何ある遠さ小在るも其小相對ふ時ハ其形貌
を眼中ハ収めて心小達す善あるか故ハ聚と云ハ義

ありといふ云あり所以か天下を所知者といふも知見と
云事ハ二專眼にて看る由の言あり万葉一二十の食
国并賣之賜年登三五十の萬代尔食賜麻思大日本久
迹乃京者十八三十一の美典之努能許乃於保美夜尔安
里我欲比賣之多麻布良之あど有ハ所知者といふ事を
賣須といふあり二十六十の時花伊夜米豆良之母可
久之許曾賣之安伎良米晚云といふ有ハ見明らむる事
を賣之安伎良米晚云といふあり又一十於保吉美乃都
藝豆賣須良之多加麻刀能努敵美流其等尔云といふ有
も見行ハ事賣須良之と詠るあり此等ハ其眼

て見るを賣須と云ふ人召と云ふ即眼前不在
するを云ふて天下を所知者といふ食国を賣須と云
も同く眼前ハ天下ハ人召聚め食国の内を見行
す事ハ成て其極る所ハ眼の一言ハ歸ち其眼ハ聚め
義ハ歸る者あり然ハ其眼ハ心神ハ達り心神ハ
り眼ハ顯る者あるを以て此ハ御眼を洗ハせ給ハ
るハ其御心を清めさせ給ハありと云ハ神ハ變して
予ハ強説ハ非る可し管子ハ道之在天者日也其在
除其心と云ハ又皇極經世書と云ハ天之神棲乎日
人之神祭乎目とも有り皆其承る所有て云ハ者ハ
事共あり○鼻ハ口と共ハ氣ハ往來ハ路あり大同

類聚方第三章保乃解波。久知與里伊剝。波奈與剝波故備豆。奈伽知多仁保乃岐波故此豆。美豆阿治字訶母反。云々。有て火氣を運ひ入る器あり其第九章半奈波。保乃計表伽與波世。訶袁剝宇新流。之有を合せて知へ。但其ハ尋常ある時の事あり然るハ上ハ伊特諾尊大驚之曰吾不意到於不須也凶目汚穢之因矣乃急走迴歸と有る計り甚しく汚穢は国ハ有けぬ其惡ハ臭ハ御鼻ハ入て甚く不平を給ひけむ所思ゆ。事ハ宝鏡開始章第二一書ハ及至日神當新嘗之時素多鳴尊則於新宮御席之下陰自送糞日神不知徑坐席

上由是日神攀體不平と有も惡ハ臭ハ爲ハ痒サセ給へるハて事ハ異あゆども其氣の鼻を犯して入る事同トけね今切め云あり神武天皇御紀ハ天皇進至熊野荒坂津因誅丹敷戸畔者時神吐毒氣人物咸瘳之有る如毒氣の類ハ非此とも其穢氣ハ依て御身の不平を坐けむ事己ハ上ハ古事記有る時置節神ノ又大同類聚方ハ差ハ上ハ謂ゆる食泉之竈類の美あゆハ本ハ伊特諾大神の抱つて給はる事あり故ハ今云ハ限ハ非るを其阿旨辭王邪と云る此御鼻ハ就たる事ハ

△清輔貞儀ハ事ハ有ハ物を云ハ思ハ云々申すめ又移すハ時意ハ依れ

類聚方第三章保乃解波。久知與里伊剝。波奈與剝波故備豆。
奈伽和多人保乃岐波。故此豆美豆阿治乎訶母反云。
之有て火氣を運ひ入る器あり其第九章半奈波。保
乃計表伽與波世。訶表剝字新流。之有を合せて知へし
但其ハ尋常ある時の事あり然るハ上ハ伊勢諾尊大
驚之曰吾不意到於不須也凶目汚穢之國矣乃急走更
歸と有る計り甚しく汚穢之國ハ有ければ其惡し
さ臭く御鼻ハ入て甚く不平し給ひけむ所思ゆる
事ハ宝鏡開始章第二一書ハ及至下日神當新嘗之時素
多鳴尊則於新宮御席之下臨自送糞日神不知徑坐席

上由是日神攀體不平と有も惡しき臭の爲ハ痒させ
給へるハて事ハ異あれども其氣の鼻を犯して入る
事同トければ今功めて云あり神武天皇御紀ハ天皇
進至熊野荒坂津因諫
丹敷戸畔者時神吐毒氣人物感瘵と有る如き毒氣の
類ハハ非れども其穢氣ハ依て御身の不平を坐けむ
事己ハ上ハ古事記ある時置節神ノ又大同柔聚方ハ
傳を立て註せる趣を見ても曉る可し
少彦名命乃美古登仁阿旨解王邪阿旨阿治味差乃不
太津者耶麻比乃門止率剝と見えたる其阿旨阿治味
差ハ上ハ謂ゆる食泉之竈ヨモツヘガフの類類あり本より伊勢諾
大神の抱つてせ給ひざる事ある故ハ今云ハ限ハハ
非るを其阿旨解王邪と云るが此御鼻ハ就たる事ハ

日本書紀傳十一
四百六十一

るか又其を二門に分て阿志計乃毛能之阿之計との
差別有て其御鼻より入りし全く阿之計の災あり
同方小阿之計乃久知波奈珥伊流毛乃波布俱之共哩
毛登須治仁都多此伊當理互乃致奈訶倭太仁伊太利
流座奈須毛乃美奈於訶世味坐登伊布と有る是にて
悪氣の口鼻より入る者ハ肺あり本筋ハ傳ハ至りて
腹中ハ入て災成す者を犯災云とあり上小日神の
不平と給へると此小阿旨鮮王邪を疾病の本ありと
有とを思合せて御鼻を洗はせ給へるハ御體内の穢
氣を拂清めさせ給へる御業あり一事を明るの奉る

可き者あり又同書ハ阿志計乃毛能乃宇奈自豫李此
路支知差奈志と有る其下ハ母能乃鮮者乃自故倭ハ
太毛乃鮮多訶可味乃ハ三ハ分ハ其ハ此ハ
上ある泉津醜女あとの類あるハ人ハ形を見せず
して右の如く犯し入を大神を追奉りハ時ハ逐却
させ給へる其時ハ現身の鬼ありけりハ其儲波奈
御鼻より入る臭氣の如きありハ別あり
云ハ面中ハ突出其端ハ在る穴ありハ端穴と云
義あるハや大同類聚方ハ訶波仁阿奈都久毛乃と云
るハの中ハ耳を美民阿那と云る次ハ鼻ハ唯波奈と
耳云て阿那と云るハ波那阿奈と云事ハ切以る故
ある可し其第二章ハ此登乃美乃奈連流半自免波云
ハ波奈ハ利久知那利乃那古奈哩美味阿奈ハ利云と

今方葉十九行中葉
を美豆波那と訓り
水

と云次第ありば又其發端ある義をも兼たる可く又
其美味阿那を一本の阿字無くして唯美味奈と有
を以て阿奈を約て奈と耳云例も有るを知べき者か
の通證小事始物端皆稱曰波奈共鼻義通野客叢書曰
方言淫益之間謂鼻為初或謂之祖然則鼻與祖皆始
之別名人孕胎必先有鼻然後有耳目之屬と云る實
然る言ゆて我が古傳の粗合るの奇しき事ある者
り○記傳六七十の云く此の御目と御鼻を洗給へる
事耳見えて御口と御耳との事の見えぬ如何りと
云へば御目の黄泉の物を見坐る穢有る可く御鼻の
嗅坐る穢有る可く偕彼處の物を食はせ給はざれば
御口の固り穢給はざり可く御耳の伊邪那美命の

御言を聞坐し又雷の色あど觸つるめと惣て色々の
穢の無きある可く然れば正しく醜穢は見ると嗅ぐ
との有る故あり云と有然る説あるを就て今云
べし偕此御身滌の事ハも伊弉諾大神の黄泉国よ
り出還坐し即物爲させ給へるが如く我も人も思ふ
事ハ有らざるも事の狀を思ふに彼国より還坐て後
小御身を洗滌がせ給ふ計の事ハ何とてハ爲させ
給はざりむ若此御身滌の時坐る迄ハ御身の汚穢
たる任り坐せりてせば其が大福事の極と云物亦
るを己に註せりが如く彼泉國ハ於て其国より来れ

る物ハ悉ク追返し給ヒ又彼處ハ行觸て穢させ給へ
る御装束ハ至る迄も投棄させ給へルハ其時の御政
ハ御心の遠る隈無く行定め給へルハ其時其あり
遙小時を経て後此御身條の御事の有る其ハ彼国ハ
到坐し時の事依難ハ雖己ハ女神と絶妻之誓を建給ヒ
て顯国ハ素戔嗚尊の所知者す御事ハ己ハ女神の時あり前小事依小旋
させ給へルハ大事を此小竟て天ハ登りて報命し給ハむ為ハ天日ハ
向ハ坐て皇祖天神を祭らせ給ヒ其清祓を行ハせ給
へるハて予有けり然ルハ此時ハ成出坐る神等ハ於
て惡ハし神と申すハ本予御在し坐ハト予理ある

事己ハ往て註せるガ如シ然るを古事記も此も枉津
て書ハハ難其を彼此切の相違も出未ル者あり然
りハ成ハ者あり此御身條ハ正時ハ予ハ説ハ如
くハ有ハ其時ハ伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前云
しハ証あり儲御眼を洗給へるハ御心を清めさせ
給ふあり御鼻を洗給へるハ御氣を清めさせ給へる
あり御身を洗給へるハ御體を清めさせ給へるハて
此三ハて神と氣と形との清祓ハ整ハせ給へる故ハ
御耳と御口との事を殊更ハ奉さるあり其ハ伊弉册
尊の愛也吾夫君言如此者吾當縊殺汝所治国民日將
予頭と申給へるを聞食てハ愛也吾妹言如此者吾則

心法普至持物
 初若以聞自天香蓋
 習車新儀式云云
 有積物若經教
 日以初者為積初
 依聞得具香之月
 計其積日云々有
 以積之為之例か

當産日將千五百頭と詔ひ勝給へる類の事共多く有
 て其御耳あり聞食し御事の御心留り計り非り
 故に固より穢と云ふに非らば此の御滌せ給ふ可
 き限の非ず御口の彼食泉之竈の男神の預りせ給
 へざる所あり又御言の勝せ御在し坐しは却り清
 り方ありは又御滌の事あり及せ給ふ可き非り
 事あるが故に殊更に其條目より載りしらずと屋と此
 ハ惣ての御身を濯がせ給ふ中在りし知へし然り
 傳の目に見たる穢は淺く名殘無き故に其より成
 坐る日月の大神の善神の坐すを鼻の嗅ぐ惡臭氣
 の深くて其名殘の論及ばぬし其記と此一書との
 難き所ありむ多左る

趣を一應に見し此たる説ありて必然の有まじき所由
 上より次の註せるが如し此ハ少く其を離れて見ざ
 りれば決り心より行き
 難き所ありむ多左る
 ○天照太神月讀尊素戔鳴尊凡三
 神を左右の御眼又御鼻を洗はせ給へ就て成坐る由の傳
 たりし此一言及古事記の誤ある事己の註るが如く
 又月讀尊と素戔鳴尊とい同神の御在し坐するは右
 眼又御鼻とに分れて別々成坐りと云ふは愈傳
 の誤ある事云も更あり然れば左右の御眼より柱津
 日神と直日神と成出給ひ次の御鼻より連佐須良
 比咩神と成出坐し古傳ありつむを其柱津日神ハ
 皇太神宮ハ荒祭宮ハ坐て天照太神の荒魂ハ坐を

其荒魂の二字を脱して洗左眼因以生神號曰天照大
神と傳誤り皇太神の和魂^{タマシ}度會宮の傍奉^{タマシ}せ給へ
る故皇太神宮あり其和魂の御事を申さざるが故
小此も別神の如く心得て其天照太神小並びて其右
小成坐る日月誦尊傳へ僻めつるより西蕃の謂ゆ
盤古代の古説も有るなり日神月神小左右の御
眼より成坐る者も中古の史人の筆に如此く異ある
一傳成れる者之所見なり次御尊より速佐須良
此咩神の成坐る古傳も右の如く日神月神を左右の
御眼小配たる上り其神あり似着ハハハハハハハハハハ故

小強て引附て素戔鳴尊と換たる者少む有けり
百事記の如く漢意の交ざるも當昔文筆の事ハ
史官の任せ置れつる其語を其任の傳へたる
漢風勉めて物為況て此御紀ある文章をす
も臨誅悉焼天皇記國記珍寶船史惠尺即疾取所燒國
記而奉中大兄と有て以て當昔の狀を知べ^{史官}
往氏録に船連と有て百濟王の未^{史官}を然^{史官}
筆^{史官}あと思え不彼國の典籍を擬ひ取て文を成^{史官}
少々の任ふる可し此を撰定む事即吾が皇學お仕奉る
者有^{史官}の任ふる可し此を撰定む事即吾が皇學お仕奉る
壽八^{史官}万歳死後日為日月骨為金石胎血為江河毛髮為
草木と有^{史官}三^{史官}五^{史官}曆記を引せ給へる有^{史官}り然^{史官}
ハ出来つる有^{史官}る可し^{史官}勅仕三子曰^{史官}第十一^{史官}一書
ハ出来つる有^{史官}る可し^{史官}勅仕三子曰^{史官}第十一^{史官}一書
ハ出来つる有^{史官}る可し^{史官}勅仕三子曰^{史官}第十一^{史官}一書

も此の事を汝命者所知高天原共事依而賜也云々汝
命者所知夜之食国共事依也云々汝命者所知海原共
事依也云々有て下小其を承て故各隨依賜之命所知者
之中速須佐之男命不知所命之國云々故伊邪那岐大
御神詔速須佐之男命何由以汝不治所事依之國云々
と皆事依の字を被用たり小同し又此正書小以故其
父母二神勅素戔嗚尊と有る勅字をも瑞珠盟約章小
々夫父母既任諸子と所見たる任字も此の勅任と同
しく訓來小と事ふり又應神天皇二十二年御紀小天
而有悦信因以割吉備國封其子等也と有る封字も其
國政を委任する意を以て用へるあり其四十年の下

小任大山守命令掌山川林野と有り此又山川林野
を掌す即其事依小奉りし職あり謂あり備此あり
勅任字に選叙令小允任官大納言以上云々勅任餘官
奏任云々等判任と三等の差別有る其字を取られた
る可し其勅任を許登典佐須と訓る許登以言して事ふり右
小引る正書の勅字を傍小美許登能理志氏と訓るを
以て曉る可し其事を言以て授依すが故小古事記の
首小言依賜也と書されたり備其言依の事ハ正
書小授以天上之事と見え天孫降臨章第一書小所
見たり顯露之事又神事又迷事などの類の事小其
政を云ふり其ハ右小引る應神天皇四十年御紀小任
大山守命令掌山川林野以大鶴鷲尊為太子輔之令知

國事毛有る古事記ハ大山守命為山海之政大雅命
執食國之政而白賜之所見たるを合せ詠て知べき者
ありし政字を各義抄ハ能理ても袁佐年々も那理
業業と為る事ハ唯賞刑を定む耳其治も可き所を治めて
ふハ俗意ハ古意ハ非ハ大同本記ハ雜爾奉年政波
行奉下天在止母水取政波遺天在ハ利と有る此二の
政字を事字ハ操て聞え又古事記息長帶日帝命の
韓征の事を故其政政悉竟之間云ハ興佐須ハ記傳四
と有る其事未竟の義あり興佐須ハ記傳四
ハ云れたる如く興須あり此ハ自他の差有る人ハ之
を興須と云ハ我ハ來るを興流と云ハ天孫降臨章第
一ハ書歌ハ妹盧豫嗣ハ豫嗣豫利據祢と有ハ日依日依爾
依寄來祢依寄來祢と云意又万葉十四十九十九ハ都麻余之許西祢

又有ハ夫寄來西祢ツヨシユセネの義あり其を興佐須と云創ハ縁
紀第一詔ハ天坐神之依之奉之隨第五詔ハ吾孫所知
食國天下止興佐斯奉志麻志麻ハ第十四詔ハ吾孫乃
命乃將知食國天下止言依奉乃隨第二十三詔ハ吾孫
知食國天下止事依奉乃任ハ第五十一詔ハ太政官之
政波誰任母之加罷伊麻須孰授加罷伊麻須有有る是
あり又此より出て官ハ任事をも同く寄ヨスと云事
と見えて同紀養老五年六月詔ハ朕之肱股民之父母
獨在按察寄重務繁興ヲモオモウツトメシメケキ群臣異と見え文粹貞信公辞撰
政表ハ擔重寄於微身負大任於小材と有る源氏桐壺

神皇正統記卷之七

卷一の皇子は右大臣の女御の御腹にて寄重く疑
ひ無き儲君と云しと有も右も同く其依しの重き
を云ふり然れは事依すと云い即政を寄り義ある事
著明き者あり備他あり我の采る事其流を云ふ事
奉御調等云く遊副川の神母大御食尔仕奉等云しと
云て下は山川母依氏奉流神乃御代鴨と結め其反歌
おも山川も因而奉流神長柄云く見え又藤原宮之
役氏作歌天地も縁而有詩曾ある有る是なり何れ
此此理の上の具佐斯も異ふ者あり名義枚
小任字を麻加須又麻く又多布又多閑多理又多母都
又於布と有て此小興須とも具佐須とも云訓い無
れとも皆共義小近き語共あり又依字を具流とも字
佐年とも多具理り○高天原は天日を云ふり此称已
多能年とも訓り
公傳四八下註る如く高天原所生神名曰天御中

主尊と有る世の限りを終て高天原と云るなり次小
神八洲起元章第三一書小二神坐于高天原日當有国
耶と有る空中を高天原と云るなり次小此は天照太
神者可以高天原也と有る是正しく天日を指て高
天原とい宣へるは其も天日を本と為て大御光の
行徹る限小豆りて世の極も及べれは悉く一義小
歸るあり今此小譬を取て曉す可し世の初は国土
代るなり若し唯滄溟小て有し時其天御中主尊の神
獲給へる時右の空の神の其潮を凝く小畫成て一嶋を
小大八洲国の出来れるは日神の高天原を治給ふ時
小當小るを其滄溟耳ありし當昔より大地を國と云
来つる任小其滄溟の中小眞小國と字く可き國の出
来りては其嶋嶼の如き國を本と為て云故お國を云

○日本書紀傳十

○四百六十九

△即高天原也
故古事記云
天原也
御言云
而天原也
華南中國也
之詔也又天

原

ハハ海ハ其小副小
物也成ぬるが如し
又勅曰以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒之見
元垂仁天皇二十五年御紀有倭大神の御誨ハ大初
之時期曰天照太神志治天原皇御孫尊專治葦原中國
之八十魂神云々有る此等ハ天日を天原と高天
原と云々云々万葉ニ
初時之久堅之天河原ハ八百萬千万神之神集座而
神分之時ハ天照日女之命一云指上天乎波所知食
登葦原乃水穗之國乎天地之依相之極所知行神之命
等天雲之八重搖別而一云天雲之神下座奉之高照日

之皇子波之し有ハ右の倭大神の御言ハ本據て詠
る者あり又此ハて日を天々之事も亦明るる
者あり是日神子孫而向天征虜此逆天道也見え
けり万葉ニ久堅之天所知流君故ハ有る其同ト
意を我王者高日所知奴又等由氣宮儀式帳ハ天照坐
皇太神云ハ大長谷天皇御夢ハ誨覺賜久吾高天原坐
立見志麻岐賜志處ハ志都真刺坐云々見え又雜
例集ハ其同ト事ハ皇太神乃教覺給久高天原我見
志末岐宮處ハ鎮理坐天云々又此を御鎮座本縁ハ我
高天原仁坐庭戸押張原如見ハ志真伎志國宮所波是

○日本書紀傳十

○四百七十

の内々在と在ゆる八百方千万神等ミカトマツリの参朝して其大御趣を奉ウケマツはる事ある故に大被詞あど十高天原ル神留坐皇親神滿岐神滿美乃命以氏八百方神等子神集賜比神議賜氏云々有を始として諸祝詞又統紀の宣命あど小敷多所見たる是あり又其天宮にて執行ハせ給ふ大御政を天津宮事と申す申其詞ハ出たり正書ハ授以天上之事と所見たる是あり道饗祭詞ハ高天之原ル事始氏皇御孫之命止称辞竟奉云し遷却崇神詞ハ高天之原ル始志事子神奈我良毛所知食氏云し統紀第五詔ハ高天原ル事波自米而云々中

臣壽詞自皇孫尊ハ高天原ル事始天云々有て九て顯国の事物の始を高天原ハ係て云ハ右の天津宮事ハて皆皇太神の天宮ハて事成れハあり此を以て御父母二神天上之事を授奉るせ給ひて高天原を所知者す皇太神の天地の間ハ二無く尊く高く大坐す御事を明くめ奉る可き者あり此ハ就て案ふハ第十一書ハ顯佐と註一宝劍出現章第六一書顯国玉神の下ハ顯云于都斯と見元たる右の高天原ハ事始也有を摸擬ハ改ハ宇都志ハ云云あり可然ハ天上の儀式人氏を摸擬ハ改ハ宇都志ハ云云あり可然ハ天上の儀式国ハ成れるあり其外事物器械共ハ天上の儀式取て此国土ハて其外事物器械共ハ天上の儀式ハ其本の天を主として云語ありと知ハ古語拾

日本書紀傳十

四百七十二

八月元帝丁書
 也天神謂伊弉諾
 尊伊弉冉尊曰云
 二神立於天上浮
 橋而引拳之即
 落海而引拳之即
 而為嶋云々

遺小里太玉命率諸部神供奉其職如天上儀の滄海原
 と有る此一事を以て也宇都志の義明けし
 潮之八百重ハ天日を高天原と云ふ對ひ小国土の全
 を云ふ古名ある事傳六十九小註る如く此ハ素戔嗚
 尊者可以治天下也と有る第十十一書ハ素戔嗚尊者
 可以御滄海之原也と有るを以知べし然るハ此ハ又月
 詭尊者可以治滄海原潮之八百重也と有る右の可以
 治天下也と有る一事あるを月詭尊者素戔嗚尊者ハ
 別神の如く傳へたること同ト事を二並へ書さし
 此ハ八洲起元章ハ底下豈無國歟と有る下ハ是
 獲滄海と有るを以て天下因土を古ハ滄海と云ふ事

灼然者あり又此を古事記ハ次詔建速須佐之男
 命汝命者所知海原其事依也と見え九
 り若し其下ハ至りて速須佐之男命不知所命之國と
 有る海を指て國と云ふハ非ず此天下を國と云ふ
 るハ又然者汝不可住此國乃神夜良比爾夜良比賜也
 と有るを以て也其上ハ海原と云ふハ此國土を云ふ事
 愈著明き者あり又此等の事を合せて月詭尊者申せ
 るハ別神ある如くありと素戔嗚尊者同神ハ坐
 すと云ふ事ハ僻事あり何を以て滄海原を因土と云ふ
 ことありハ右ハ引るハ洲起元章ハ伊弉諾尊伊弉冉尊
 之ハ以天之瓊矛指下而探之是獲滄溟其矛鋒滴瀝
 之潮凝成一嶋と云ふあり處ハ小嶋皆是潮沫凝成者矣
 と云道ハ成出たる大八洲國ハ更あり外國にも當昔
 ハ未小嶋あり故ハ然るハ之有り有けれ今の如く

△尚又出雲凡工記
 不所以号出雲者八
 東水臣津野命詔八
 雲立語故云八雲立
 出雲之有八雲出
 現章小素葦鳴尊
 歌之有八雲立詔
 都長壽朝識岐云
 有八雲立詔
 云云あり此を見
 時其大神の亦御
 名ある事論を持
 一て明あり然
 八東水八弥清水
 大水云云發詔
 臣津野大水津
 申す事此海大
 水の裁ありと云
 が如く弥清水大津
 主命申す心て廣
 海原潮之八百重を
 所知者す由御名
 あり事を思明む
 可

皇大御国の中国と立て其外邊ハ蕃屏マカキの如く圍まめり
 て大きく成れるも皆滄海原ハ生出る潮沫の八百重
 小凝コウ累積ツミて成れる事已ハ傳六七卷ハ註せるが如し
 古史微ハ滄海原ハ高天原須佐之男命ハ滄海原と相對
 て天照太御神ハ依別給へるあり此國ハ滄海原と指對
 滄海原と云る證ハ神代紀ハ獲滄溟又一書ハ畫滄海
 海原と見え古事記ハ許袁呂許袁呂迹畫鳴而之有私記
 天沼矛以畫者鹽許袁呂許袁呂迹畫鳴而之有私記
 ハ阿遠宇那波羅志富許袁呂迹畫鳴而之有私記
 古事記之說也世ハ有ハ本ハ塩字ハ青海原ハ志是
 字有ハ此國ハ海原と云る者ハ須佐之男命ハ所知海原ハ
 海原を後ハ此國ハ海原と云る者ハ須佐之男命ハ所知海原ハ
 見命ハ知ハ其下ハ須佐之男命ハ所見ハ海原ハ所知海原ハ
 此國ハ其下ハ須佐之男命ハ所見ハ海原ハ所知海原ハ

由以汝不治所事依之國而哭伊依知流と詔へる何
 り哉汝の事又大忽怒詔然者汝不可往此國と有ハ其依
 賜ハ給へる此國ハ大忽怒詔然者汝不可往此國と有ハ其依
 事ハ無ハ二神ハ勅汝甚無道不可往此國と有ハ其依
 見ハ父母ハ二神ハ勅汝甚無道不可往此國と有ハ其依
 此宇宙ハ全ハ性惡常好哭傷國氏多死御依ハ有ハ其依
 日假使ハ此治ハ性惡常好哭傷國氏多死御依ハ有ハ其依
 此國ハ八重ハ重ハ天下ハ也云ハ心違ハ不天常啼泣ハ有
 鳴尊者ハ可ハ治ハ天下ハ也云ハ心違ハ不天常啼泣ハ有
 不可ハ第ハ十一ハ一書ハ素葦鳴尊者ハ可ハ治ハ天下ハ也
 也ハ有ハ其ハ更ハあり然ハ素葦鳴尊者ハ可ハ治ハ天下ハ也
 有ハ其ハ更ハあり然ハ素葦鳴尊者ハ可ハ治ハ天下ハ也

○日本書紀傳十

○四百七十四

故に如し書されしあり可し又漢籍に統御四海と
云語有り治滄海原潮之八百重と云ふ能似たる言
り御四海と云へど海を知と云事あり思合せ
て治海原と云義を辨へ月詠尊素戔鳴尊同神坐す
事をも思定む可しと有然言あり但此文甚く切
めて此に用無事ハ刪も補ひも爲て引るあり
儲潮之八百重と云ハ右に引る八洲起元章の趣ハ更
あり生島神祈年祭詞に生國足國登御名者白 辞竟
奉者皇神能敷坐島能八十島者谷璞能授度極塩沫能
留限狭國者廣久峻國者平久云しと見元たる塩沫能
留限と云ハ潮沫の地方に留り疑成るを云て國形の
廣く太く成る謂ある事已に傳六丁又祝詞講義
に説註せり如し然れば八百重と云ハ其如く潮沫

の留まり疑累積り重ありて國土と成る事を云ふハ
て山の累あるを八重山と云ふ雲の累あるを八重山
あり云を猶甚しくハ國能八十國鳴能八十鳴あり云
ハ猶其上を云時ハ鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百
會あり云か如く物の數を極盡せる意を以て八百重
と云あり又八百重とも云べきを五百重とも云事
百重浪立毛居毛又細兎之山五百重隱有六ハ五百隔
山伊太割見又朝名寸二千重浪縁々某寸二五百重浪
因ハ八零雪者五百重零數十ハ白雲五百遍隱あり多
く見元たる五ハ敷の五ハ非ず彌の夜を省けりハ
てハ心彌の伊を略けり義あり者あり若て其八百
重あり云ふ重ハ物の層あり義ハ隔字の義ありハ

又五十隔山重成
物字

葉四

三十

燒大刀乃隔付經事者

隔を幣ハカ用ひ十

二十七

小置薦重タニミコモヘテアムカス編敷と重字を隔ハカの義ハカ用ひたるを

以て其類を推す幣物ハカ界ハカを立て分ハカの意あり行方ハカあり

との方ハカも我の居所ハカ界ハカを立て幣ハカと云るあり奥邊ハカの

邊ハカも奥ハカ界ハカを分ちて幣ハカと云るあり道路ハカの經ハカと云も

行て界ハカを成すあり隔字又間字を問多都と云も界ハカを

立るあり又阻字を問那流と訓るハカ界ハカの成る意あり

小合せて知べし然れハカ八重百重五百重八百重十重

あとの幣ハカ各間ハカ有る物ハカを重ハカ合ハカせ云語ありと知べ

き者あり此ハ重ハの意を解クハ叢性ハサハ似たりと

雖も予ハ師ハ古史傳ハ説ト

ハ狀述義ハ出たる
公望記ハ問答自
重者有阿意或答
是欽明海水之深如重
六言海水之深如重
八百言其深也
ハ甚ハ拙ハ説ありハ
百重ハ潮沫の深重
あるを云ハ海の
深深ハ就ハ百重
あり云ハ者ハ

合ハカりや合ハカざるや若合ハカさハカらむハカハ師説を耳信ハカ居る
筆ハカの心ハカハ落着ハカせ玉ハカとてハカ如此ハカハ思出る限ハカを書ハカし
置ハカく者ハカ若て傳ハカハハカハ註ハカせる如く月鏡尊ハカと申奉る

ハ素戔嗚尊ハカの夜之食国ハカハ幸行ハカして月神ハカと成ハカせ御

在ハカし坐ハカしハカり後ハカハ称奉る御名ハカハ坐ハカが其荒魂ハカハ海神

豊玉彦命ハカハ坐ハカて其大神ハカの国ハカハ幸給ハカふ御所ハカ為ハカを輔

相奉給ハカひて月ハカの出没ハカハ後ハカひて潮ハカの満干ハカを成ハカして古

より今ハカハ至ハカりて違ハカハざるハカハ奇ハカハハカも靈ハカハハカく妖ハカハ

りハカとも妖ハカある事ハカありけハカ故思ハカふハカハ月ハカハ己ハカく此国ハカハ

より分判ハカて實ハカハ夜之食国ハカと云狀ハカハ固ハカより大虚空

を巡ハカりて有ハカしハカくハカも素戔嗚尊ハカの其国ハカハ入坐ハカしハカり

けの其来經定ありて其より其荒魂と坐す海神の其
小應へて潮の上り下り爲つて隨奉了事と成りけ
むり古人も誤るゝ無く月の水の従ふと云ふ一
を以て此の月読尊者可以治滄海原潮之八百重也と
書して後の御名を初め及ぶしたる者あり古事記ハ
大略此一書と同小傳ハ惣て異あり
所知海原矣事依也と有れ此も決めて其如く有け
む事云も更あり然れ此ハ如く此有る上ハ次の素戔
ハ別あり同ト事の重復あり又古事記ハ次詔月
読命汝命者所知夜之食國兵事依也と有る後ハ夜之
食國ハ幸行して月神と成給へる傳を御言依り月中
小収たるも重複れりあるガ此惑り元ハ一日神月

神を左右の御眼より成坐すと云ふ僻傳の出来つる
うり強て三神ハ爲る事故ハ如此く強たる事ハ成れ
りき ○神名式ハ山城國葛野郡葛野坐月讀神社大月
次新 又有ハ顯宗天皇三年御紀ハ春二月丁巳朔阿閉
臣事代御命出使于任那於是月神著人謂之曰我祖高
皇產靈尊有預鑿造天地之功宜以民地奉我月神若依
諸献我當福慶事代由是還京具奏奉以歌荒攬田歌荒
在山城國 壹伎縣主先祖押見宿祢侍祠と有ハ此神ハ
葛野郡 壹伎より歸りて奏せらるや同ト四月丙
辰朔庚申日神著人謂阿閉臣事代曰磐余田献我祖高
皇產靈尊事代使奏依神乞献田十四所對馬下縣直侍

△右の押見宿祢ハ歌荒洲田の部伊伎氏系譜の據る神也
 天兒屋根命十二世孫雷大臣命子神根命其子神足命
 命子大田彦命子酒人命子神奴子命子忍見宿祢命と書日
 して下右の御紀の文とて載りて皇代記國讀神
 郡歌荒櫟田之地十五町天兒屋根命十八世孫壹伎島司
 ト部忍見足祢奉幣以爲皇孫御尊月讀宮以主神
 事と有る是なり

祠と有る御誨ハ京にての事と所見たり然れば此ハ
 事代ハ任那ハ使して壹伎島ハ船泊爲て在つる時ハ
 葛野郡ハ坐月読大神の御名衆して民地を請せ給へ

三竹實録ハ貞觀元年正月廿七日甲申奉授壹伎嶋
 從五位下明詔神從五位上と見えたり此御誨の事ハ
 靈尊の下ハ云ハ其を見て知べきなり然れば此壹
 岐島あるハしも右の葛野坐月読神社の別社とも云

○其然る所以ハ右ハ引る伊伎氏系譜ハ此時始自壹伎島
 迂居山背國葛野郡歌荒洲田也宿祢神社今在松尾里
 有る事實を合思ふ可也其子孫神月讀宮長官とて其神ハ
 爲て神祇官の宮主を兼て任奉り又本國壹伎島司と
 任され奉れる事と少縁城國也訓郡神表見之矣高櫟
 子孫正八位上讀岐月讀宮二人有る兄ハ雪雄其職ハ
 繼て弟ハ淵雄と云るハ羽東御長官と成り其傳御紀ハ
 九たり也

田ハ或書ハ顯宗帝歎山背國葛野郡歌荒櫟田十五町
 以爲月読神地歌荒櫟田在大堰河之西南即今松尾之
 東南地是也と有る爲月読神地ハ如何ある事ありと
 と思へ然る可し歌ハ後紀ハ延暦十二年相山城國
 葛野郡宇太村之地爲遷都也ハ有るハ今ハ京より西
 方嵯峨邊迄の惣号ありハハ類聚國史ハ延暦廿五

祠と有る御誨、京にての事と所見たり然れば此
事代が任那に使して壹伎島に船泊爲て在つる時
葛野郡に坐月読大神の御名乗して民地を請せ給へ
り者あるが壹伎縣主先祖押見宿祢侍祠と有るを以
見れば祠に其国に於ても其時より其人を羽束師社と兩社の神主と成され又社を定めて仕奉れりある可し神名
帳に壹伎島壹伎郡月読神社名神高御祖神社と有る
是に其時押見宿祢をして令祠給へりし社に有る
三代實録に貞觀元年正月廿七日甲申奉授壹伎嶋
從五位下明讀神從五位上と見えたり此御誨の事ハ
靈尊の下に云れり其を見て知べきあり然れば此壹
伎島あるハしも右の葛野坐月読神社の別社とも云

べき者 儲其宣以民地 奉て誨給へるハ高皇產靈尊
の封田を獻以て宣へるハ其神ハしも神名式に山
城国乙訓郡羽束師坐高御產日神社大月次と所見れ
る此社あり可き事傳四八下に云るか如し其歌荒攪
田ハ或書に顯宗帝獻山背国葛野郡歌荒攪田十五町
以為月読神地歌荒攪田在大堰河之西南即今松尾之
東南地是也と有る為月読神地ハ如何ある事ありと
も惣てハ然る可し歌ハ後紀に延暦十二年相山城国
葛野郡宇太村之地為遷都也ハ有るハ今の京より西
方嵯峨邊迄の惣号ありしハ類聚国史に延暦廿五

年以山城国葛野郡宇太野為山陵地と有て甚廣き
 地名あるを思ふ可し荒櫟田ハ大中臣定好松尾鎮座
 記ハ山田庄荒子山アラシヤマ之云地めて今嵐山と云る是れ
 松尾ハ其麓あり有れハ其東南地實ハ歌荒櫟田ハ當
 り可し然れハ此時其田を封田として其押見宿禰を
 して令祠の備其本国めても此由ハ縁て月詭神社高
 御祖神社ハ初て祠へるめて羽束師葛野の兩社ハ甚
 上代より山背国ハ立せ御在し坐けむを月詭神社
 の方ハ封田も何も萬ハ足へりけむを其傍ハ坐す皇
 祖天神ハ然る御趣けり未有さめハ故ハ如此く請ハ

仁天皇十五年
 御紀ハ初て所見て

せ給へる者と想像り奉るるあり其ハ同ト御誨あり
 余田我祖高皇產靈尊之其田を指て宣へるを月神の
 御誨ハ以民地奉と有ハ已ハ其社の有ハ未封田の
 無き趣あり葛野ハ應神天皇六年御紀大御歌ハ菟道
 野上より望見給ひて知婆能伽豆怒塙弥例磨と謠ハ
 せ給へる地めて郡名ハも郷名ハも成て和名抄ハ葛
 野加度と有る是あり備此月詭神社の所在今ハ松尾
 神社より二町許南續ハ山本松室村と云ハ在れども古ハ其葛野河濱ハ立
 せ給へり文徳天皇實録ハ南衡三年三朔戊午移山城
 国葛野郡明詭社置松尾之南山社近河濱為氷所鑿故
 移之と有を以知ハし備其河ハ山城風土記ハ詭

ゆる葛野河のしつ上りて大堰河と云ひ下りて
桂河と云て皆一條の流あり其西の傍に桂里と
云有り是は神代より其神の鎮り御在り坐り日地を
りけむ事次は云るが如し林道春が神社考の文徳帝
仁壽三年春夏之間痘疹流行病之時神現形曰我は大
堰河濱所居神名為月詭神我居近河頭有泛溢之患今
欲移居於松尾之南山若能敬祭我者災害當自消矣帝
得神語大悅乃會廷臣祭之隨神誨遷宮于彼地以祭之
自是以來天下每有瘡之疫人無貴賤詣此社以祈神之
佑云々有ぬ此仁壽三年の御誨有りて齋衡三年の

予移し奉るせ給ひけり
但此神社考の説は何より
書有て其より取ぬるある可し右の葛野川の亦壙川
云名も有けるや拾芥の壙川今号上桂左衛門
府知之葛野川今号下桂右衛門府知之有り桂里ハ
其川西に在り上桂中桂下桂と云て今三村に分れた
り山城名勝志の凡土記曰月詭尊受天照太神勅降
于豊葦原中国到于保食神許時有一湯津桂樹月詭尊
乃倚其樹立之其樹所有今号桂里と有る漢籍に謂ゆ
る月中有桂の事より附會たる説ありむと思捨て有
りども其保食神の許に到坐し間ハ猶素戔嗚尊と
申して未月詭尊と云ふ御名坐さる項ありしハ此
も第十一一書の如く月詭尊と云御名を以て書せる

故^ハ然^ル疑^ハも出来^ナらね古事記の如く姑く素戔嗚
尊と^シて見る時ハ此を桂里と云ふ所由も知^ラれ且
其より轉りて葛野と云地名も成^ルり^ハを其即郷名
と成^リ郡名と成^ルる故^ハ其元より月詠神社の立せ
御在^リ坐^シ地名も僅^クの桂里と云名の遺^ルる事も知
る又此^ハ依^テ神代の遺跡を直^ニ神社として斎^キ
来^ルる故^由をも知^ベく^ハて甚^ク可美^キ傳ある者か
り然^レ右の斎衡三年の移奉^ルるよりこ^ノ葛野坐
すハ書^シけめども元ハ桂坐あり^ハ有^キむ事又右の
風土記を以^テ察^ス可^キ者あり^ハ然^レハ天下の在

ゆる月神の御社ハ此葛野坐ハ勝^ルる曰^ハ非^リ
けり月桂の故事ハ蓋^シ囊抄ハ桂^ノ壯子の説有^リ西陽雜
記^ハ樹^ノ創^シ合^ス其人^ハ姓^ハ吳^ノ名^ハ剛^ノ西^ノ河^ノ人^ナ字^ハ仙^ノ有^リ過^シ謫^シ之^ハ伐^シ桂
と有^ル此^ノ事^ハ又^ハ太平御覽^ハも出^タれ^ハ古今集^ハも久^ク方
の月桂^ハも秋^ハ紅葉^スれ^ハ照^ル勝^ルる^ハ此^ノ事^ハ勿
取^テ詠^ハれ^ハ其^ハ一^ハ此^ノ桂^ノ里^ノ故事^ハを見^テ混^ルる^ハ事^ハ勿
れ又^ハ此^ノ桂^ノ里^ハを伊^ハ勢^ガ久^ク方^ノの中^ハ生^タる^ハ里^ハあり^ハ光
を耳^ヲ頼^ムむ^ハ得^ルて^ハ云^フる^ハ詠^ルる^ハも^ハ統^紀ハ大^ニ宝^元年^ハ四^月
此^ノ古^ノ傳^ハを心^ヲ得^テ云^フる^ハあ^ラず^ハ統^紀ハ大^ニ寶^元年^ハ四^月
丙午三日勅^シ山^背國^葛野^郡月^詠神^云等^福自^今以後^{設^テ都^賀志^神}
給^中臣^氏と有^ル上^ルる顯^宗天^皇御^紀ハ壹^伎縣^主先
祖^神見^宿祢^侍祠^と見^元た^レハ件^社ハ其^神見^宿祢
の子孫^{あり}壹^伎直^ノ代^ハ其^神長^ト仕^奉ル^ル神^{あり}故^ハ其

△若て右の引了伊伎氏系譜の跡に見え宿禰命子
 大富命子十握命子若彦子若狭子若狭子若狭子若狭子
 二年甲寅夏六月五日夜天皇皇孫(德)皇孫(德)皇孫(德)皇孫(德)
 而手差舉日輪月輪放天光明其光遍照十方國土有
 金銀七宝之城郭即告曰汝等當諦聽我國皇是東讓御讓
 月之國也見改君臣其故祭神祇治國政令汝等守歸
 三宝勿諸神祇恐有天神地祇之祟宜先敬祭神祇
 長久天下泰平矣天皇皇孫(德)皇孫(德)皇孫(德)皇孫(德)
 聖德太子告以神語太子大驚畏獻在背和知泉河内
 丹波近江美濃國之内久世忍海日根逐野素日善積多
 藝七郡於山背國葛野御月讀大神宮以爲御宇研
 命卜部伊吉宿禰乙等奉幣帛令祭祀焉其後天皇記
 曰云々と見えたる其後以下其十五年紀の文を全
 載たるありがれつての文係孫の證確あり大御尊の御尊
 斯る神威の御事也御在御坐御坐御坐御坐御坐御坐
 小引て注せる伊勢國月讀神の御坐御坐御坐御坐御坐
 体同しく書神を以て孫の傳へて終へる御事なり

橋本經亮説の松尾社司の秦氏ハ押見宿禰の裔也
 元ハ押見氏と云ふ事あり月讀社司元ハ押見宿禰の裔
 相續ては奉りしり中世松尾の秦氏人を智取
 家職を譲りしり秦氏成りしり傳たり永久三
 年松尾社司等の書なる佛經の奥書ハ月讀社司見
 久安三年八月七日卒有て時世も符合り此相元松
 尾の秦氏より出で月讀社の押見氏を續たるあり
 の如く秦氏とい改たる宿禰の後あり然るを反様
 て松尾の秦氏を推見宿禰の後あり然るを反様
 其ハ本秦氏の蓋種あるを思傳へ下成り然る成
 したる事の有し終つて實傳の如く成り然る成
 と云ふ事不然なる有る此の就て思ふハ松尾の秦
 氏ハ元其歸化し其葛野郡に任せたりハを彼ハ盛
 祿の率末りて其葛野郡に任せたりハを彼ハ盛
 換る迄ハ終つて右の如く氏をさへハ神階ハ三代
 小貞觀元年正月廿七日甲申奉授山城國從二位葛野

○日本書紀傳十

○四百八十二

△政あやゆ依て
 世相親しむつ

月読神正二位と有り又九月八日庚申山城国月読神
羽束志神云々等遣使奉幣為風雨祈焉之見内然以
臨時祭式有祈雨神八十五座の中月読社の漏
下る如何有る事小拾芥抄小月読社松尾社有之
年三月文書小松尾社官等謹言上云々御師相言神主
相行正祝宜云々月読社宜重富標谷称宜相友月読祝
重康標谷祝重房三宮称宜相久有○又同国綴喜郡
標井神社新嘗此も統紀小大宝元年四月丙午三
日勅山背国葛野郡月読神標井神木嶋神波都賀志神
等神指自今以後給中臣氏と有右の社上小云々如く葛野
坐月読神社と共小壹岐氏の神長として仕奉り社

ありつゝ玉を中臣氏に隷て令祠給へるに依て此勅
ハ有ける有る可し若然とむわ其葛野社より移し
祭りる社ありともや儲統後紀小兼和十二年五月丁
未朔乙卯山城国言綴喜相樂兩郡境内始自去三月上
旬蟲虫珠多身赤首黒大如密蜂好咬牛馬咬處即腫相
樂郡牛斃盡無餘綴喜郡病死相尋郡司百姓求之龜筮
就佛神隨分被禳曾無止息移深之氣于今此行者令卜
其由綴喜郡標井社及道路鬼更為祟即遣使祈謝之兼
賜治牛疫方并祭料物と有りて可畏き神威坐し故
有て崇給へる者有る可し古事記有る蛇室蜂室の故

△下五百の云々大伴
神社記の月夜見傳
の御馬其節天下の馬
の祖ある故申之也
考合す可き有る

事を思ひ又古語拾遺ある御歳神の蝗を放ちて稲苗
を令食給へり一事をも考合せて曉る可き者あり備
又此道路鬼と云るハ道路神と云事ハて謂ゆる岐神
あるを強て漢めうしく書れたる者あり若て其月神
ハ更あり岐神共ハ共^其筋の事をハ守る神ハ坐せども
御心ハ叶ハせ給らざる時ハ然る御崇も有る事ハ
て甚く測奉り難きハ神の御心ある者ハよ^{神祇令}
義解ハ謂ト部等於京城四隅道上而祭之^{道饗祭}言欲令鬼魅
自外來者不敢入京師故預迎於路而饗也^{有ハカ如}
く諸國ハてハ道^上ハて岐神を祭る事ハ祝詞講義ハ委
非^ハず思混ふ^ハ此ハ道路鬼と有ハ右ハ謂ゆる鬼魅ハ
鬻久飛虫也^{知名阿夫と見えたるあり}神階ハ貞觀元

年正月廿七日甲申奉授山城国従五位下樺井月読神
正五位下と見え同九月八日庚申山城国樺井神遣使
奉幣爲雨祈爲と有り此よりの例と通えて臨時祭
式ある祈雨止雨の祭神の列ハ預^ハせ給へり^{其祭ハ}
坐月読神社ハ却りて八給ハぬを此神の預^ハせ給ふ
ハ井と云縁ハ由れる今詳あらず此社今水主村と
云ハ立せ御在又同帳ハ並びて同郡ハ月読神社大月
嘗^ハと有り此をも樺井と云けるハや右ハ引る三代実
録の文ハ並びて奉授山城国従五位下樺井月読神従
五位上と有て御位の一等後水させ給へるハ此社を
置てハ何ゆの社と云爲ハ然れハ其所ハ異處ハ坐せ

△傳子三神小妻
 一云云々が如く
 右の樺井と此
 橋原と共小古
 小井河田と云
 ける地あるを
 思ふ小具支神
 と后神と相分
 れて鎮り御在
 坐す事少此
 小深き所以有
 る者なり其
 所小考合可

右の樺井神の別社ある故小共小同トク樺井月
 読神トハ申奉るある可ト備此月読尊ハトも素戔嗚
 尊ハ坐故小隣の相樂郡小綺原坐健伊那大比賣神社
 固田鴨神社新嘗 固田国神社新嘗 然るハ綺原坐ハ
 其御由縁ハ神等ハ多く坐るウクト 后神あり鴨神社
 ハ事代主神ハ御孫あり国神社ハ大己貴神あり由
 あり然ルハ御子ハ坐るを思ふ不可ト何れハトも右
 の樺井神ハ甚古き社ト通えたり又同式ハ丹波国栗
 備此月読神社大任村ト云ハ在り 又同式ハ丹波国栗
 田郡小川月神社大 有り此ハ山城国葛野郡小続
 隣ハハ故有る御事ある可ト郡中ハ松尾神社大井
 神社あり坐て如何ハト由有げある事共あり神階ハ

三間長各丈
 弘文高八尺二間長
 八尺弘六尺高六尺

三代實録ハ貞觀元年正月廿七日甲申奉授丹波国從
 五位下小川月神從五位上ト所見たり 和名抄郷名ハ
 加波ト見えたり是あり此社を或書ハ ○又同式ハ伊
 今池尻村ト立せ御在し坐す由云り 又同式ハ伊
 勢国度會郡月読宮二座 並荒御魂命一座 有り大
 神宮或
 小月読宮二座 太神宮 北三里 月夜見命一座 荒魂命一座ト
 有る是あり太神宮六月ト次祭九月神嘗祭等詞ハも
 荒祭宮月読宮 亦如是ト申進止 宣ト見えて諸別宮ハ
 中ハも殊ハ勝ハさせ御在し坐す趣あり皇太神宮儀
 式帳ハ月読宮 殿四區之中此一称伊勢諸尊次称伊
 勢丹尊以上奈良朝廷御世定祝次称月読命御形兼馬

△以上人物志定
 供奉御床四具御
 居一字長一丈六尺
 大玉垣四重長四丈
 間二間高七尺

男形着紫御衣金作帶大刀佩之次称荒魂と見えたり
 ハ伊佐奈岐宮も未其時ハ月詠宮居て表ハ立給はずの相殿の如く御在
 りありけり三代實録ハ貞觀九年八月二日代展勅
 伊勢国伊佐奈岐伊佐奈弥神改社称宮預月次祭並置
 内人一人と有て此より分り坐る故ハ太神宮式ハ
 荒祭宮伊佐奈岐宮月詠宮と其序を被成たり者あり
 備其奈良朝廷定祝と有ハ元ハ月詠宮の相殿ハ御在
 一坐けるを其御世ハ正殿二區を奉り恒例の神事を
 別ハ奉り事と成れるを云わて此朝廷ハ新ハ設
 させ給へるハ非る可ハ次ハ別る宝龜三年御紀を

以て明らむ可き者あり同帳六月例ハ四神殿在西宮
 二殿一殿坐伊佐奈岐尊靈東方二神殿在之中一殿坐
 一殿坐伊佐奈弥尊靈神荒魂同と有て如此く東西ハ別ハ御在ハ坐と坐も
 當昔唯月詠宮の号耳有ハあり所以ハ祝詞ハも右の
 如く伊佐奈岐宮を別たずして月詠宮荒祭宮ハ云と云ハ
 年中の諸祭等も古ハ月詠宮一院と立て別ハ被分さ
 りハ者あり備其正殿四區ありハを西殿二區を合せ
 て一殿と爲る伊佐奈岐宮是あり其東殿二區を合せ
 て一殿と爲りて月詠宮と成れる事貞觀の頃よりの
 御定あるハ故ハ太神宮式ハ伊佐奈岐宮月詠宮と別

△を攝土年二月丙
申相神祇官言伊
勢太神宮手先為
有宗遷建他處
而今近神郡其宗
未正除飯野郡之
外移建他地者許
之有

小記一被載者あり其ハ神名秘書ハ仁壽二年
損云々神衡二年九月廿日云々急造假殿奉鎮兩宮御
體供奉也伊佐奈岐神與伊佐奈神又月夜見命與同
荒魂神正體洪水之時御同座之間奉任神鹿奉鎮干同
殿也貞觀九年改社號新宮置内人員員回十年増作宝殿
但伊勢冊社日夜見命之社無増作也見元九心但此
此月夜見命之社ハ月夜見命之荒魂奉社有心を
字の脱九光仁天皇御紀小宝龜三年八月甲寅辛難波
者あり
内親王弟是日異常風雨拔樹祭屋下之伊勢月讀神為
崇於是每年九月准荒祭神奉馬又荒御玉命伊佐奈岐
命伊佐奈弥命入於官社又徙度會郡神宮寺於飯高郡
度瀬山傍と見えたる此ハ太神宮雜事記ハ天平神護
三年十月三日逢鹿瀬寺永可為太神宮寺之由被下宣

肯之有て其より效僧共の我意を極ひて神人を輕蔑
しめたる事見え又同七年條ハ左大臣宣奉勅永可停
止神宮寺飯高郡可破越宣旨ハ有り然此とも未其事
行ハれざりけり此を以て此御崇ハ有けるあり可
一此時迄ハ朝廷ハ佛法を好ミ玩ハせ給へり故ハ
其神宮寺を被定ると云も一廟あり御崇敬を増奉
セ給ふ御心ありけむを此ハ始て月讀神の御崇有
故ハ此ハ皇太神の甚く忌嫌ハせ給ふ者ハ御心着セ
給ひて其寺を神郡の外ハ移す耳あり其忌詞を
ハハ定めさせ給ふ計ハ至れり者あり顯宗天皇三

勢国度會郡宇治里佐古久志留伊須乃川上亦御幸
行坐時儀式云々有て二柱神共御幸行坐す趣小
在比と崇神天皇六年御紀より以天照太神託豐鍬
入姬命祭於倭笠鏡邑仍立磯堅城神籬と有て月詠尊
の御事とて見えざるあり古語拾遺小其事を載た
るの仍就於倭笠鏡邑殊立磯城神籬奉遷天照太神
及草薙劍令皇女豐鍬入姬命奉齋焉と有り此を以て
儀式帳小月詠之神と有ハ即草薙劍の御靈小坐事著
明く説得べく為て妙ありとも歎ある事あり此一を
以ても月詠尊素戔鳴尊の同神小御在坐す御事更

然るに丹後國加佐郡笑原神命古風神御事あり者あり若て景行
并匏宮して渡らせ給ふ不慮及長五年御事御事あり者あり若て景行
領主細川忠興主の書れたる天皇棟札文小崇神天皇御位
川九主成歳使豐鍬入姬命天孫神籬御事千倭姬命云々於是倭姬命
見命于此地以奉齋一年取草薙劍後皇孫御事あり者あり若て景行
近與佐郡九志渡島以奉齋此時始有與佐郡名焉御事あり者あり若て景行
有て右の儀式帳の旨小命身藤原國御事御事あり者あり若て景行
同神して渡らせ給へる証鳴尊の御靈と爲て齋奉り是あり然るに儀式帳小

月詠宮の御形を葉馬男形著紫御衣金作帶大刀佩之
と有ハ其素戔鳴尊の月神小渡りせ給ふ方を齋奉り
せ給ふが故に此宮を素戔鳴宮とい申さざるあり同
神を別ハ小祭る例猶多在る可し譬へハ大國主神の
如きも或ハ大物主神と祭るれ又ハ大國魂神小祀

勢国度會郡宇治里佐古久志留伊須乃川上御幸
行坐時儀式云々有て二柱神共御幸行坐す趣小
右以とも崇神天皇六年御紀小以天照太神託豐
入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬有て月詠尊
の御事とて見えさる有り古語拾遺小其事を載
了乃仍就於倭笠縫邑殊立磯城神籬奉遷天照太神
及草薙劍令皇女豐鍬入姬命奉斎焉有て此を以て
儀式帳小月詠之神有即草薙劍の御靈小坐事著
明く説得べく為て妙ありとも歎ある事あり此一を
以て月詠尊素戔鳴尊の同神小御在坐す御事更

論小何れも及ハざる御事ある者あり若て景行
天皇四十年御紀小十月壬子朔癸丑日本武尊登路之
戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姬命云々於是倭姬命
取草薙劍授日本武尊曰慎之莫怠也有て此より後
小尾張国熱田宮小鎮坐す御事と成て天照太神素戔
鳴尊の御靈と爲て斎奉り是あり然る小儀式帳小
月詠宮の御形を乘馬男形著紫御衣金作帶大刀佩之
と有ハ其素戔鳴尊の月神小渡りせ給ふ方を斎奉り
せ給ふ故に此宮を素戔鳴宮とい申さざるあり同
神を別小祭る例猶多在可一譬へハ大国主神の
如きも或ハ大物主神と祭るれ又ハ大国魂神にて祀

○日本書紀傳十

○四百八十九

世に
御
紀
云
々
御
紀
云
々
御
紀
云
々
御
紀
云
々
御
紀
云
々

或ハ大己貴神ハ八十矛神ハ其御功の別有る故
 小カ如ク各其御名ハ替れる其御功の別有る故
 御功坐り依りて勸請れる如シ其若ク其荒御玉命ハ上
 三百五十六丁ノ己ノ註ル如ク海神豊玉彦命ハ渡リ
 四百二十一丁ノ己ノ註ル如ク海神豊玉彦命ハ渡リ
 世給へる葦海潮の月の出没ハ隨ヒて満ム干ム爲ツ
 月神の国土ハ幸給ふ御功用を資奉リ世給ふ神ハ
 坐す事ハ申すも更あり御父大神ハ可以治滄海原潮
 之八百重也と依リ奉給へるも滄海を本トして国
 土を兼ナる称ある事己ノ註ル如クあレハ動ク小
 事ト予ハ思定めてあレ有ける神宮典略ト云書ハ
 神社ニ座祭神ハ例の難知ハ機殿儀式帳ハ魚海社三
 前月詭命豊玉彦命豊玉姬命合三柱神靈也又最世社

記ス月詭命荒魂神靈鏡奉遷テ魚海神社是神託也
 皇興ル同奉ル神眼ハ行渡ル故あり其内宮
 神人ノ辨シて外宮ニ出ル書ハ在ル事ト云
 ハレ是非ヲ云フ捨テをユけテ事ハ為レルト云
 其奥意ハ汚キ心ヲ有テ却テあレ其ハ五十歩百歩ノ
 類アリ○又同式ハ度會郡月夜見神社太神宮式ハ
 知ベト度會宮所撰十六座月夜見社云々右諸社並類祈年神
 嘗祭マ見エたリ是ハ不リ等由氣宮儀或帳ハ月詭神社
 正殿二區ト所見タ一區ハ荒御玉命の御あり可キ
 事上有ル月詭宮の例ハ思准リひテ曉ル可シ神名秘
 書ハ月詭宮一座在神宮靈御形鏡坐宮号時之有ルハ
 一神の如くありト虽も其下ハ神名内宮同體神也

と有を以て荒御玉命も坐す御事を明らめ奉り可
神宮典略小應永頭工日記小應永廿六年正月四日
一月夜見宮同小殿炎上之有る此時神體焼失せ坐
し、應永外宮遷宮記小己亥年火神體不坐故去年遷
宮夜以本宮神宝鏡二面為御體圓鏡納御假櫃と有り
此本年遷宮と記す此十年八月廿八日説宮遷
御指倉と有を云ふ斯れ此時古の御體坐
ず成しありと云り但右の引る神名秘書小宮号時奉
渡之と云れば其の古ののて無くして兼え四
年宮号宣下の時更み定め右の如く古ハ度會宮の所
以奉り御體ある者あり
撰第一の御社にて有しを土御門院天皇の大御代小
至りて更小宮号を奉りせ給ひて四所別宮の第三小
成し奉りせ給へり類聚大補任建曆元年條の別宮月
説宮一院右神者准土宮之嘉例依神事之增加定別宮

可被増作宝殿寸法之由兼元四年三月廿五日次第上
奏之處同年五月廿二日依請被下宣旨也増宝殿寸法
諸事任土宮之例致沙汰募別宮以私物所造進也と見
元たる是あり^土上宮之嘉例と此より以前^{崇徳天皇}大治三年
小宮号宣下有て長承二年小宝殿増作の事を上奏し
保延元年小遷宮有し其例を逐て上奏せりしあり其
後伏見天皇正應六年凡宮の宮号宣下有て右あり有
来り高宮を合せて四所別宮と成りし者あり
土宮の御事を右の典略外宮儀式帳小六月十七日
即更宮地神酒一疋供奉と有る此神あり然
以宮地を守給ふ御靈神あり可し内宮の興玉神
同ト聞ゆと云ふ然る言あり其宮号の事ハ源師

○日本書紀傳十

○四百九十一

時御の長秋記長兼二年條上宮准七別宮可預官幣
云々同三年六月廿一日按察使未設云明日可在仗議
事朝家大事必可參豐受大神宮土宮被外宮地至神也
然而年未無預官幣而今度准七別宮可預官幣之旨自
本宮依申請已蒙裁許仍重申請云御殿元高五許尺也
而准七所別宮者每年荷前幣物可納御殿内也件幣物
二十一年遷宮外無取出事者不天造於御殿件物無可置
之處者准内宮荒祭外宮高宮等可被造此御殿一文許
有何難哉云々有を土宮之嘉例以爲之月讀宮也
仕奉るむと上奏したるあり神名知書小大治三年六
月五日官符改社号爲宮預祈年月次神嘗祭幣也是宮
川堤爲守護神也保延元年遷宮之時造宮親章進之
と有る例を此弘安九年參詣記も月讀宮兼元四
も引る者あり

年五月廿二日宣下土宮の例の任せ別宮として寸法
を増奉る可き由造宮使仰せらるゝと有り神祇本源小
も准土宮嘉例依申子細兼元四年五月廿二日被下宣

旨被授宮号不建曆元年辛未造宮使増作神殿准内宮
加作小殿以下同十二月十八日奉成遷宮引と見之何れも
異ある事無一備此月夜見神社小宮号の宣旨を請奉
る然ナせる節有ての事とハ聞えざれども決く神の御
心ある者あり典略ハ内宮の月讀宮ハ己くあり別宮
と云ふ然る事ハ有れども宮号宣下ハ甚々朝廷ハ
ても大事ハ在を容易く請ふ許すも許すあり
上下の心右の如く打合せ万世の制と定み事ハ
も豈ハ縁の事ありや然れハ斯る事ハ至りてハ私
の論を捨て公平ハ説然るハ其月夜見神社と聞え
成し奉る可き者あり

古より豊受大神宮の所攝第一の神小渡りせ御在
坐す御事ハ一も此大神ハ珠ハ親しく御在し坐べ

日御契淺く、御在り坐す其原根を云へば此第十
一書中天照太神在於天上曰聞葦原中國有保食神
宜尔月夜見尊就候之日夜見尊受勅而降已到于保食
神許保食神云々夫呂物悉備貯之百机而饗之是時月
夜見尊忿然作色曰云々迺拔劔擊殺然後復命具言其
事時天照太神怒甚之曰汝是惡神不須相見乃與日夜
見尊一日一夜隔離而住云々有る此中擊殺と有る
古事^{記あり}も然るれども誤傳りて攝津凡土記の方正しき
由傳九五十又此卷^{三十五}丁中も云るが如くあつて何れ
も為る保食神の御為り月夜見尊ハも甚トき御

歎りて渡らせ給ふが如くあるも此中依て此大神
の因土の幸給ふ靈威の彰はれさせ給ふ御事ハて天
照太神の皇御孫尊の齋庭の穂を御せ奉らせ給ひ
より天津日継と云事定りて因を瑞穂国と云も其日
嗣の稲穂ハ依る事ハ申すも更なり生と一治る人皆
の命統々食物着物住家の事迄も備はり足ひて後ハ
ハ掛巻も甚も可畏き皇御祖と坐す天照坐皇太神宮
と然しも異り無く持斎られ御在り坐す程の御徳ハ
しも此月夜見尊の事有て出来現はれさせ給へるか
故中然しも親^{物為させ給ふ}御事と恐れねども其御事實の上

不寔の明^りありける者をや若て又其日夜見尊の
豊受大神を資けて奇^き神威^を成^し奉^り給^へる
所思^しさ田有り其傳十四卷の神名式有る出羽
国飽海郡大物忌神社^大名山神社^大の御事を奉
て誣すを見て曉^る可^きあり古事記あり此時を須佐之
男命と難無^し大宣都此賣神と
為^り何^れお^して同^神あり丹波郡と典謝郡と丹後
国比^の例^{あり}神名帳考證須代神社の下の引^る大同
本記^の素^茅鳴^尊所^生三^女神奉^助天孫^而為^天孫^所祭
止^詔之^神丹波^国共^佐郡^比沼^真谷^坐須^勢理^姫乃^有
奉^礼留^神云^と有^も旁^由有^る傳^る事^瑞珠^盟約^章
第一^一書^の傳^を云^を○月詠尊を祀^る社猶此彼有
考^合せて曉^りてよ
の神名式小撰津国住吉郡大依羅神社^大神^四座^並名^大

日次相^又有^上四百二十九丁^の考^記せる如^く其祭神^の海
神^{あり}可^く所思^ゆる社傳^の所^祭月詠尊^大已貴命
五十師命^並仁^天皇^也と云^る其月詠尊と海神との本
體^は荒魂^の坐^{して}相^共ひ御^在る事^右の内外^兩宮^の
属^給へる月詠宮の御事を以^て知^る然^らば此^も其^海
神^の必^坐べきを其月詠尊^の相^副て一^座として被^祭
給^へる故^に海神の御名^の幽^に給^へるあり若て月詠
尊^大已貴命^の御父子の間^に坐^せば共^に御^在る坐^へ
事^下小^奉る信濃国佐久郡大伴^伴神社の例^を以^て知^べ
五十師命^並仁^天皇^の御事傳^無り知^れ由^無り偕

高平九月廿五日
 撰津国大依羅神
 遷使奉命幣為
 雨祈焉有これ
 祈雨神の列に
 給へり又

統後紀の兼知十四年七月甲子朔丁卯修造撰津国大
 依羅社為官社と見え神階ハ三代実録の貞觀元年正
 月廿七日甲申奉授撰津国從五位上勳八等大依羅神
 從四位下と有て重く持成り奉りて給ふ社ハ臨時
 祭式有る八十嶋祭神の列に坐すも海神の御在り坐
 せハある可し撰陽群談ハ大依羅神社祭神天八現彦
 津国神別ハ我孫大己貴命天八現津彦命之後也と見
 えたり猶由無き孫大己貴命天八現津彦命之後也と見
 何有む猶由無き孫大己貴命天八現津彦命之後也と見
 吾彦の事を註して我孫の事を云む又但馬国朝来郡
 粟鹿神社名神此も上四百二十九丁ハ註る如く神名帳頭注
 小上社彦火と出見尊中社籠神女體也下社豊玉姬勸

請如此と有る籠神ハ女體也と云るハ如何ある事か
 りとも祭神ハ實ハ其如く有べきあり若て其次ハ又
 云伊弉諾伊弉並相生之兒大日靈神月読素戔鳴合三
 神云々所見たるハ異説ハ非ずして實ハ其大神
 等も鎮坐ハ故ハ又云々云る者あり然して其籠神
 ハ海神ハ坐せハ右の三神の中ハも殊ハ月読尊の坐
 ハ大日田有る者あり社傳ハ崇神天皇御代ハ鎮坐ハ
 云るハ官幣を被獻し初めて神代よりハ旧跡ある可
 事海宮遊行章の傳ハ因として云ハ又社傳ハ神功
 皇后韓征の御時御幣帛を奉りて給へる由云ハ本社

小乾満の二玉を藏むと云り神階ハ三代実録ハ貞観
 十~~六~~年十二月廿七日丙戌授但馬国佐五位上粟鹿神
 正五位下同十六年三月十四日癸酉授但馬国正五位
 下未鹿神正五位上と見えたり神祇官承万記ハ阿
 波鹿社と記せり和名枚郷名ハ粟鹿加波と有り備乾
 珠を此社ハ藏むと云を先ハ疑居りしうごも予但
 馬丹後の国ハ往來ハ時ハ道を枉て詣て聞くと甚
 奇~~し~~事あり有ける此氏子ハ更あり當國ハ日下部
 姓の家ハ多在るが~~鱧~~を食ふ時ハ必~~忽~~ハ神の御咎有
 て見ると口~~あ~~の曲るが故ハ誰も慎しめて大~~小~~
 忌~~ハ~~事~~ハ~~此~~ハ~~就~~テ~~人~~ハ~~の云~~ハ~~け~~ル~~嫌~~ハ~~其~~ハ~~二~~珠~~ハ~~一~~と~~大~~
 真珠ある故ハ鱧を食ふ事を神の嫌ハせ給ふや~~と~~
 云~~ハ~~る然~~ハ~~も有~~ハ~~べし何~~ハ~~も爲~~ハ~~お~~ハ~~甚~~ハ~~高~~ハ~~異~~ハ~~あり玉あり
 又聞~~ハ~~又同國養父郡夜夫坐神社五座名神大~~二~~座と有~~ハ~~る

但馬国統風土記云書ハ上社大己貴命申社倉福塊
 命大彦名命下社谿羽道王命帆足尼を所祭と云~~ハ~~
 又~~ハ~~一説有~~テ~~保食大神稚産靈神日夜見尊夫穗日命
 帆足尼命ありとも云~~ハ~~り云~~ハ~~り何~~ハ~~れ~~ハ~~も~~ハ~~一~~ハ~~て~~ハ~~も保食神
 を主として祭~~ハ~~れ~~ハ~~る一説ハ方正~~ハ~~し~~ハ~~る可~~ハ~~し神階ハ
 三代実録ハ貞観十一年三月廿二日庚辰加但馬国佐
 五位上養父神正五位下と有り和名枚郷名ハ養父不
 と有~~ハ~~る是~~ハ~~あり今~~ハ~~大~~ハ~~養~~ハ~~父~~ハ~~村~~ハ~~と云~~ハ~~り立~~ハ~~せ~~ハ~~御~~ハ~~在~~ハ~~し坐~~ハ~~
 主仙石氏の儒者ハ井上~~ハ~~観~~ハ~~と云~~ハ~~り人~~ハ~~の有~~ハ~~て著~~ハ~~し~~ハ~~り
 嘉永三年六月廿九日予養父郡八鹿村西村氏と云
 小~~ハ~~到~~ハ~~著~~ハ~~たるを聞~~ハ~~て素~~ハ~~より相~~ハ~~知~~ハ~~る任~~ハ~~り其~~ハ~~書~~ハ~~を携~~ハ~~来~~ハ~~
 りて見~~ハ~~せたるを記~~ハ~~憶~~ハ~~居~~ハ~~て今~~ハ~~記~~ハ~~せるあり此人頗~~ハ~~る大

日本書紀傳傳十

四百九十六

儒の聞え有る人ありしと云ふ魂ハ皇国魂也如此
く其地志の事ハ心を勞きたり此や実の儒者云者
の任ハ〇又同式ハ信濃國佐久郡大伴神社有る祭
有ハキ
神月夜見尊大己貴命有る由社記ハ見えたり止也
己四百三註せざるが如く彼國ハ古大湖あり
間ハ海神の御子宇都志日金折命の領居下地あり
ハ佐久郡ありと云由有るハ就て思ハ信ハ然る可ハ御牧望月大
伴神社記進状注ハ云く掛卷毛畏支信濃國佐久郡横
鳥郷望月之里御相谷相尔鎮坐須大伴神社者月夜見尊
也大己貴命也注伊邪那岐尊乃宣久日夜見尊者可以
治滄海原潮之八百重也如斯事依志給尔因也月夜見

尊即青海原表治食須時龍馬尔乘給也四方乃國中
河ハ溪ハ尔至也。不殘睨巡給支其時千四川尔到給也
川上哀指天登給尔此溪川依清水成而水水上也登給
反其處尔高支巖有支故彼若上尔登坐也四方哀望見
給也此神霧溪尔蒼生乃往之佐也榮牟事表御心中尔
神議と賜天彼角馬川乃岩上尔度之出坐支或時神霧
溪尔至也彼若上尔登利坐天金弓金鳴鑄子取持豆天
之真名井尔移年止宣也地中尔投入賜婆其處其利清
水涌出而甚美加利支故乃喜哉止詔而東方子御覽而
宣久朝日直刺罔落日日照罔也止宣天神霧谷統松山

麓金井原乃。下津若根尔宮。柱太敷立。高天原尔个木高。知互鎮坐。之有。此近。月夜見尊の故事あり。偕此。傳。青海原表治食須之云。四方乃國中。之河。溪。尔至。迎不殘。睨巡給。夜之有。其知食。天下之睨。巡。給。小あり。次文。大己貴命の天下。袁睨。巡給。東国。之。云。之有。應。語あり。を以。知。偕。此。睨。巡。給。へ。る。ハ。素。愛。鳴。尊。と。聞。え。一。程。出。雲。國。の。清。宮。小。御。在。坐。て。天下。を。治。食。一。間。右。事。あり。可。又。此。社。傳。も。素。愛。鳴。尊。名。あり。事。又。青。海。原。と。天。下。て。同。ト。事。あり。此。國。土。を。云。稱。あり。事。も。知。名。稱。の。紀。記。の。古。傳。の。徵。と。成。る。事。あり。御。牧。の。中。あり。見。御。桐。谷。と。神。霧。溪。と。一。延。喜。式。信。濃。國。

公あり可一上あり皇
本神儀式帳小月書
御形之葉馬形
之有を思合す可
き者あり

馬 思川ハ万葉十四信濃奈流知具麻能河泊能左射礼
角母伎弥之布美氏婆多麻等比呂波牟之有是あり
葉五少多都能馬母伊麻勿愛豆之可又多都乃麻字阿
礼没毛等米牟あり見元日本紀竟寡歌多都乃古麻
之有て足疾を馬へり西蕃の之駿大吳庖義氏の時
ハ龍馬負圖出河と云能人の之龍と云少但此月神
馬七尺以上曰驪八尺以上曰駮曰龍と云少但此月神
の乗せ給へるハ真小龍の馬と化て駕奉り一故ハ角
あり難し前漢書ハ臣易上政不順厥妖馬生角あり云
ハ空理ハ泥む可くす金弓金鏑を投て水を得給
ハ井依て其地を金井原と云事聞えたり又天之真
名并々多牟のハ字を誤りハ天上の眞名井を
此ハ移むと云次ハ是後大己貴命以廣天八重雲表
事あり可一
押分也。天地字翔行。天下表睨。巡給。東國之五月蠅
色如須邪神字。神拂尔拂平賜而。此處尔到坐。天月夜見

○日本書紀傳十

○四百九十八

尊乃鎮坐受神言予畏美悦比慎美謹美毛爾奉伴奉氏
相殿尔鎮坐尔因氏大伴神社止奉崇支其後醍醐天皇
御宇藤原朝臣忠平等奉勅官幣有志時此郡内三座之
中一社尔撰波礼氏泰毛武内之一社也之有大己貴
命の相殿小坐す所以を云あり右の以廣茅の語を隔
てて東国之云し係り云を押分る非也
天地宇翔行氏云し其邪神を拂平給ハむ為小先其
國體を眺巡給ハるあり出雲神賀詞ハ天穗比命宇國
體見尔遣時尔天能ハ重雲字押別氏天翔國翔氏天下
乎見廻返事申給久と有る類あり以廣茅東国之邪

神宇神拂ハ大伴神社注進狀ハ大己貴命以廣茅為敎
令撥平豊葦原中国之邪鬼と有る是あり月夜見尊乃
鎮坐受神言予畏美云ハ前文ハ東方乎御覽而宣久
云鎮坐支と有る其事を宣出たるあり慎美謹美毛
爾奉ハ此時ハ大己貴命國作り時ありけり其ハ
り己根國ハ入坐し其より明國ハ到坐て月夜見尊
と申奉る頃ハあり故ハ其鎮坐支と有る御靈を爾
奉て給へるを云あり其時又己命の御靈を也苗奉
りて御伴ハ侍奉て給ふ政ハ大伴神社トハ申す
あり然れハ此ハ氏ハ大伴ハ非ず相伴ハ申す以て
大伴トハ云ありけり但伴奉氏相殿ハ鎮坐と云

近古傳にて因茲大伴神社止奉崇友と云ハ後ハ其
改革ハ依テ定メたる社号あり其官幣有志時
云ハ官帳ハ被加テ祈年国幣を令奠給ハる事云ハ
郡三座ノ其次ハ古昔月夜見尊彼岩上ル幸以末里子
四月止号^支又彼岩上ル月御影残礼留衰以天其石字
月輪石止号久其邊乃湖水尔月輪洲止云處有是影向
之處尔比于今不思議殘礼利月夜見尊此處尔鎮坐之
時彼龍馬尔所置御鞍字自手擊^{サケ}天^天廣野之石尔懸賜支
後世尔鞍掛石止号久其角馬者則助乃種止成礼利如
此靈坂奇異大神之御形字遷奉而奉崇奉爾苗御收望
月大伴神社尔天地共尔永久尔鎮利大坐天今上天

皇玉體安穩四海奉平五穀能成尔夜護日守賜此奉
賜也云尔神主金井某敬白と有り彼岩上云くと云ハ
上ハ奇支巖有支故^彼彼岩上尔登坐天四方哀望見給^と
有る其あるが後ハ^{其大神の明神と成坐}大己貴命^命の御趾を卜て望月と号
たるある可^ハ又彼岩上^上尔月御影殘礼苗衰以天其石
字月輪石止号久とハ其如く圓ある圖の有を取て其
御靈とハ祀へりしある可^ハ又月輪洲ハ于今不思議
殘礼利と云ハ其ハも御靈を苗坐ハ故ハ奇^ハハ其
有を云ハ^ハ然^ハ右の名共ハ大己貴命其御又大
神を供奉^ハせ給^ハ不御心遣^ハ然^ハ号^ハけ^ハせ給^ハひ^ハけ^ハむ^ハ

亦知心ハりハずハ月輪ハと云地名山城國葛野郡ハ有ハり
ハ移ハして月輪ハと云所有ハり九條ハ又其地名を紀伊郡
ハ殿の地是あり又播磨國統風工記ハの鞍懸石神部ハの沖
ハ在ハり大己貴命御鎮石ハと云り其龍馬と角馬ハ同ハ小
ハ今鞍懸島ハと云て小島有其あり
 物ある事上の小註ハ云るが如し偕其角馬者刺駒乃
 種止成礼刹ハ有ハ此中眼ハ有ハ傳あり其ハ第十一
 一書ハ此神の保食神許到坐ハ後ハ天照太神復遣天
 熊人往者之云ハ唯有其神之頂化為牛馬云ハ天熊人
 悉取持去而奉進之ハ有ハ其より天上ハて令飼給ハひ
 けハ一宝鏡開始章あり素戔鳴尊の御荒びの中ハ放
 天班駒使伏田中ハとと剥天班駒穿殿薨而投納ハと有

を以炳然ハ然るを此国土ハ馬と云者の始ハ如何ハ
 して有初たるハ傳無ハ知ハハりハぬを此文ハ其角
 馬者則駒乃種止成礼刹ハ有ハ依ハて考ハるハ素戔鳴尊
 天ハてハ衣食任の物を換給へりハとも天より被
 逐ハて降坐ハ後ハ其衣食任の事を以て天下蒼生ハ
 御恩頼を令蒙給ハ事耳を以て任ハ給ハへる事神典
 の趣ハ所見たるが如し然れハ此も其中の一種ハ
 て実ハ廣く厚き御賜物あるが此牧ハ初ハ成出ハ其
 より四方八面ハ蕃息りたる者ある事此傳ハて甚ハ
 明ハちある者あり上ハ四百八ハふ引ハる兼和十二年御紀

榊并月神の崇給ひて牛馬の多く斃盡たる事をと思
合す可き者あり然れ此注進状を以て皇典典の缺漏
を補ふ事少うござる故に今全文を基て改註す所
此書奥書に這一卷以大伴神祝金井美濃守本字
御之正徳四年甲午夏藤原朝臣有其次の右殿下
御本拜開之即謹写訖左府生福判と見えたり右文を
讀下して見ると何處にも文の滞無くして甚美たく
古傳の仕ありて如何に書取り得べうと思ふ
事多くして中中古の人の手成りて雖も古文の
古文と判然に見ゆるが如くも校意を加へば
る可し此本予が友小泉保敬が讀岐国高松城の考信
を予亦写取て宝と爲りあり○素戔嗚尊者可以治天
下也と有ハ上上四百七下の辨へたる如く可以治滄海原
潮之八百重也と同上事あるを言の換はる故に重複

れる者あり此一の論有り正書に伊弉諾尊伊弉册
尊共議曰吾已生大八洲国及山川草木何不生天下之
王者歟と有て此於是共生日神云次生月神云次
生蛭児云次生素戔嗚尊此神有勇悍以安忍云故又
母二神勅素戔嗚尊汝甚無道不可以君臨宇宙固當遠
適之根固矣遂逐之と有を見ら此ハ天下之王者を
生むと爲て生奉らせ給へるあるが其時ハ日神の生
坐ハ古語拾遺ハ久志備所生と云類わて思わし
寄せ給はざりし御子の生出させ給へるあり初ハ
り天下之王者と云ハ御在し坐すして質性其在ハ

日神ヲ渡ラセ給ヘハ素戔嗚尊即大八洲国及山川
草木の全を所知食^シ天下之主者ヲ渡ラセ給ヘルガ
故ハ御事依^ルの御事を上^ニ云ズ^レトモ著キ者あり
此を以て不可^ニ以君臨宇宙^ト其照應^ハ成あり^ク若^シ其
素戔嗚尊の別名^ハ其を除く可^ク理^ハ凡^ハ八洲起^ル
元章第一^ニ書^ハ出^ル其正説^ハ以て国名^ハ其^モ
此^ハ除^ク時^ハ殘^ル所^ハ素戔嗚尊^ハ一^ノ神^ト其^ハ第一^ニ書^ハ伊
弉諾尊曰吾欲生御宙之珍子乃以左手云^ハ是謂大日
靈尊右手云^ハ是謂月弓尊又回首云^ハ是謂素戔嗚尊
即大日靈尊月弓尊云^ハ故使照臨天地素戔嗚尊是性
好殘害故令^テ下治根国^ニ有^ル此^ハ宇宙を統御す珍子

を生むと欲^シして生給へるハ日神月神を生坐^ス故
ハ使照臨天地^ニ有^ルハ殘^ル素戔嗚尊^ハ其御宙
之珍子^ハ當^ル給^ヘル^ハ御事依^ルの事^ハ無^クも天
下之主者^ハ御在^リ坐^ス事^ハ灼^ク然^ト故令^テ下治根国^ニ云
ハ可^ニ以治天下^ノ友^ヲ云^フ者^ハあり^ク第一^ニ書^ハ日^月既^ニ生
云^ハ次^ニ生素戔嗚尊^ハ此神性惡常好^シ害^ス国民多^ク死^ス
故其父母勅曰假使汝治此国必多^ク所殘傷故汝可^ニ以取
極遠之根国^ト有^ル然^ル日^月既^ニ生^ハ天下之主者^ハ非
ハ別物^ナハ^シ次^ニ有^ル素戔嗚尊^ハ屬^テ国民^ト云^ハ
治此国^ト云^ハ其^ヲ放^チテ^ハ可^ニ以取極遠之根国^ト云^ハ

之ハ云々有リ然根国と云も極遠之根国と云も此国
ノ者有リ借日神一柱ハて事ノ濟タル所有リ也右
ノ二傳共ハ月神と素戔嗚尊を別神として奉たる任
並ハて云々有リ次ハ此ハ月詠尊者可以治滄海原潮
之ハ百重也素戔嗚尊者可以治天下也と有る事有る
ハ此ハ對せ考ふ可キ文ハ第十一書ハ月夜見尊者
可以配日而知天事也素戔嗚尊者可以御滄海之原也
と有る^ハ其月神ノ御事ハ正書ハ其光彩以配日可
以配日而治故亦送于天と有る事有る也^ハ傳八^{六十}
ハ云々如く日と月と天^共並^{身ハる物ハ}故ハ^{此神名を奉る}御依ノ事無
テハ文意ノ落着さる^ハ故ハ係たる語と所思えたり

顯宗天皇三年御紀有る月神ノ御誨ハ我祖高皇產靈
尊有預鑿造天地之功以民地奉と有る御命ハ甚近キ
證ハ有リ此神初素戔嗚尊と申して天下を治し
時ハ其国土を經營せ給へるハ皇祖天神ノ相預
て令鑿造給へる御恩賴を思わして顯人神ノ御許ヨ
リノ御祭を乞はせ給へる有る若唯ハ月神^身ハ御在
坐むハ天地を鑿造せし事然計ハ事奉させ給
ふハ及ふ^ハ者有る也^然然^ハ古事記ハ次詔
之食國矣事依也と有る夜之食國^ハ即月ノ事有るハ
天下を大己貴神ハ授置給ひて其^ハ根國ハ給ひ
月國^ハ移り所^ハ知者^ハ後ノ事有る^ハ此^ハ御事依^ハ給ひ
中^ハ混入^ハなる^ハ者有る^ハ事^ハ已^ハ傳^ハ八^ハ卷^ハハ^ハ如^ハ

△尚傳^ハ由^ハ六^ハ十^ハ三^ハ日^ハ
と見合す可^ハ也

○日本書紀傳十

○五百四

右の如く仲くを逐て切る時、素戔嗚尊ハ正書
にて天下之主者有り第一書にて、御宙之珍
子と有り第二書にて、治此国と有り此ハ可以
治天下也と有て更ハ異説有る事無きを第一書
中至りて可以御滄海之原也と云ハ古事記ハ次詔
建速須佐之男命汝命者所知海原其事依也と有て右
ハ宇宙と云ハ天下と云ハ別あるが如く有れども
然ハ非ず正書ハ次生海次生川次生山云々と有て其
所あるニ神の御言ハ吾已生天八洲国及山川草木何
不生天下之主者歟と有て相照りて思ハ国土山海

の皆を合せて滄海原潮之八百重と云事ハ成て其即
宇宙とも天下とも云物ハ有ける然ハ已ハ云
日如く高天原と滄海原と對ハ天上と天下と對ハて
共ハ同ト事ト知ハ然ハ此傳ハ素戔嗚尊ハ月
の如く有れども滄海原潮之八百重と天下ハ一物ハ
此即其異説あり正傳を生て其同神異名ある御事
甚ハ靈ト有る心ちして有る思ゆるハ年已長矣
云ハ古事記ハ故各隨依賜之命所知者之中速須
佐之男命不知所命之因而八拳須至手前啼伊佐知
伎也云々と有て雅ハたるハ此ハ漢文ハ易簡ハ書ハ
明たるあり其玉垣宮殿ハ本年智知氣御子云ハ是御

子八拳鬚至子心前眞事登波受て云て其年の長あり
 給へる事を其年の聞せたるあり然るに此の復生八
 握鬚鬚と有る其長あり給へるを云ふに非ず其長亦
 此給へる形容を云改り此の殊更年已長矣と云文
 有あり如此皇國の古語を漢文の書取るに然
 記さる悪き事ありつゝむを今將此綏靖天皇御紀
 を説くにも又其辭難事多在り
 手研耳命行年已長久歷朝機と有る長字を此
 同卜く於伊と訓たり垂仁天皇御紀の誓津別王是生
 年既三十鬚鬚八掬と有るを合せて此年已長矣と有
 る趣を思ふ可し老字を於由と訓み見馴たる心あり

異るむめれども相壺巻の源氏三歳に成り給へ
 を此御子の於其須宜以て御存りと云こと有り注し
 於其須宜ハ長ありたるを云と云る如く人の年を經
 て長あり行を老といふありけり然るに於伊ハ大往
 の義あり年の大い行經るを云う古事記日代歌の阿
 良多麻能登斯賀岐布礼波阿良多麻能都紀婆末經由
 久と有て年月の往と云語の有を以知へし應神天皇
 紀の長典以孰尤焉云と不逮于長子云と長者多経寒
 暑既爲成人云と有り此の訓むるに思
 へりしうごも中なる物極ひて有けりたて御紀
 の古き訓ハ世の識者を経て定おれる者あり
 有るに此を以て古語を得又古意を得る事あり
 此其仕ゆて有むる宜うけられ故今も其如く

○日本書紀傳十

○五百六

今集解引
遊部の古記
ふ時詔自吟
日以後子足毛
成八束毛遊詔
也と云事と見

て有
あり ○生八握鬚鬚ハ私記ハ問八握之鬚如何答言其
鬚之長如八握其古事記云而八拳須至于心前也握訓
と有、如し右引る無仁天皇二十三年御紀ハ鬚鬚
八握を夜都加比宜年須麻也尔と有る年須也此の生
之同ト事ハて巳ハ御年ノ長有びさせ給へる形容を
云あり出雲風土記ハ大神大穴持命御子阿遲須知高
日子命御須鬚ハ握于生晝夜哭坐之ると有る記傳
七十八ハ八拳ハ弥束ハて唯長き由あり知名抄ハ鬚
口鬚也加美豆此ハ鬚鬚願下毛也之毛豆比ハと見え
たハ心前ハ年那佐伎と訓ハ至ハ伊多流麻傳ハ訓

又須鬚の本字ハ
て説文ハ面毛也と云
ハ漢書注在願日
須在願日鬚と有て
字ハ其有る事ハ
れハ此ハ其毛也
此ハ鬚ハ在る毛
ハて此鬚ハ在る毛
ハ

て心前ハ至^至至^至と云事ハて成長ハ坐て如此ハ頃迄
云事あり此唯齡ノ長く成れるを云古語ハて甚上
代ハ如此く其ハ無く其狀を寛舒ハ云て甚ハ雅ヤ
ある者あり^採と云ハたる實ハ然ハ言あり備比宜ハ
傍^{サケ}毛ハて頭髮を主と立たる種あり可^{記傳ハ鬚}
秀毛ハて有^有ハ^ハ神武天皇御紀ハ畝傍山顯宗天皇御紀ハ
と有る是ありハ万葉五ハ志可登阿良農比宜可伎撫而
と有ハ握と為^為ハ^ハ足^足ハ^ハ志^志可^可登^登阿^阿良^良農^農比^比宜^宜可^可伎^伎撫^撫而^而
云ハ握^握ハ^ハ名^名神^神記^記ハ^ハ引^引る^る出^出雲^雲国^国日^日御^御崎^崎社^社記^記ハ^ハ上^上社^社ハ
束水神八握鬚尊者素戔嗚別称也蓋八握鬚生之縁矣
と有る八束水神ハ上^上四^四百^百七^七十^十三^三下^下ハ^ハ云^云る^る如^如く^く弥^弥瀆^瀆水^水神^神と

今古より神田彦
神を日御神と申
下物語ありて
不詳なり大穴
あやふき事あり
髪類の美ありて
習俗の有る事
あり

申す義にて滄海原潮之八百重を御す由にて別あり
とも八握髪尊と御名も御在るあり又鞆川記ハ八束
鬘速佐須良命とも有ハ御鬘鬘の珠小勝以て長く美
ハハ御在り坐す謂あり古事記ハ大穴年逢神の須
佐之男大神を逃出坐す所ハ握其大神之髪其室毎縁
結著く有ハハ御鬘鬘耳ハ非ず御髪も尋常ハ御在
り坐さりハハ状ありハ寔ハ八握髪尊とハ申奉る可き
御事ありハハ備八束鬘速佐須良命と申すハ八束鬘
薦枕高御産初日神ありて速く繞りて此ハ八束鬘
ハ八束鬘速佐須良命と有ハハ髪とも鬘とも申せり
有ハハ然此大神の御鬘御鬘を以て御名ハ負坐

る所以ハハ古事記ハ八拳須至于心前啼伊佐知伎
也其泣狀者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾云ハ有
るハ如く其初天下を治さむとも思ハハたぐざりハ
程ハ使青山變枯と有る御事其の有りを其後天上ハ
参上り坐し聞ハ種ハ御荒ハ有て其時ハ千座置戸
の被具を被責給へり宝鏡開始章ハ至使被髪以賤其
罪と見え古事記ハ切鬘及牛足凡令被而神夜良比尔
夜良比岐と有て髪を被き鬘を切と云ハ何の用アリ
云ハ千座置戸の料ハ其髪鬘より草木ハ化て被具と
成ル由其傳ハ云ハ又宝鏡出現章第五一書ハ素

茂鳴尊云、乃按鬚髯散之即成叔又按散胸毛是成摺
尾毛是成披眉毛是成撥禿云々見えたる如く其大
神の毛髪より諸の屋打材成り又夫須噉八十木種皆
能播生とも有れ其因ふ就て斯る物迄も生出し
らば其御髪を以ても御髯を以ても寔は御名名負給
ふ可き所由有る事あるか有ける此は予案考有
の講義の己の註せるを此の右の二章の就て力
の限り説明の奉る可し其宝鏡開如章の按其
手足之凡疑之有を其旁三一書の以手凡為吉凡棄
物以足凡為凶凡棄物と有て凡の事ハ右の如く明
未聞さるも髪鬚の事ハ至て一尙ハ説得たる言を
合す可き文有る事を曉るべし彼此の如く見
ふ其所限りの説の故に得ざるあるが其亦此の生ハ

握鬚髯云々の事より孕まり出
たる事を知ずて猶不足あり○虽然不治天下ハ上
の可以治天下也と有を尋問の物為て御心ハ係させ
御在し坐さるを云て古事記ハ不知所命之國而云々
と有る是あり儲治天下と云ふ御事ハハ八洲起元
章第一一書ハ天神謂伊弉諾尊伊弉冉尊曰有豊葦原
千五百秋瑞穂之地宜汝往循之と見え皇祖天神と
り陰陽二神ハ宣以附たる御功業あり儲此正書ハ二
神共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不生天下之
王者與と宣以て生成し給へり御子素戔嗚尊ハハ
も大八洲國及山川草木の王者と坐て天下を治す可

さ大神の渡り給へし其御功業を続か奉り給ひ
て謂ゆる修理固成是多陀用幣流之國と云ふ皇祖天
神の大神の御首の隨ひ奉り給へし可き天下之主者
と坐り其が即皇祖天神の神隨定給へし御命のて陰
陽二神の事始給^行給ふ神道是る事傳七^五の委し
明りめ註るが如し然るを治天下とし云へし天下萬
身思ふめりし謂ゆる漢意ありて天下の大道の首を
得知ざる者あり其も天下を治し者す神道の大事の
ありて廣くさるあり修理固成と云ふ理と云ふ一義耳
も然る僻心得しつる者あり多るあり我然るは此素戔
皇典を窺奉り奉り委しつるあり然るは此素戔
鳴尊の御事をしし正書に令国内人民多以矢折復使

青山變括マ云ひ是性^{第一書}好殘害マ記し第二一書に國民
多死青山爲括マ有るあり右の皇祖天神の御命の
御首の違ひ二柱御祖神の大道の背り給へる者か
して此大神ありて異^ケし御行あり有れども其
生出坐て未幾時も経給へざる間も御母神ありも根
固れ已く入御在し坐し故に永ぶるも戀慕ひ奉り
せ給ふ耳常も御心あり係させ給ふ事ありしは甚幼
き程より其戀泣せ御在し坐す耳を御所業として御
年已れ長り給ふも猶も御在し坐ししは天下之
主者として修理固成是多陀用幣流之國と云ふ所あり

至らせ給はさりし故に然る物損ひある事共の有て
自^然悪神の如くも姑く見えさせ給ふ御事も有し
り第十一書保食神を怒罰めさせ給ふ事有し
ハ素より御父大神の御許を得て根国に罷坐あむ
為給^ふ辞^ふ天上の昇らせ御在し坐ての事あれば猶
更の御事あり又其れ就て得し御心治め給は
ぬ條の出来て謂ゆる天^津罪を犯し給へる又其れ依て
其後具を徴し給ひ終に神逐はれ御在し坐るあ
皆自然の勢あり然るを記記の撰者ハ更あり世この
識者も其源根を探めず粗わして心を枝葉に留め物

為る故に何時も素戔嗚尊と云へハ悪神
の如く記しし説も為る事さる甚し著無き事あり
け此道不可正書ハ故其父母二神勅素戔嗚尊汝甚無
父母勅曰假使汝治此国必多所殘傷云云此神逐の
事を父母二神ハ係て云ハ固より誤ある事今云ハ限り
非ずと雖も此ハ父母二神ハ治す事ハ固より神性
其ハ右の如く父母二神ハ治す事ハ固より神性
の悪給ふ事ハ成りて其情後母於根国と有し依て
類ハ神^ハ惡^ハ此^ハ給^ハひ^テ其^ハ情^ハ後^ハ母^ハ於^ハ根^ハ国^ハと^ハ有^ハし^ハ依^ハて
御父神^ハ惡^ハ此^ハ給^ハひ^テ其^ハ情^ハ後^ハ母^ハ於^ハ根^ハ国^ハと^ハ有^ハし^ハ依^ハて
思^ハ其^ハ御^ハ本^ハ性^ハの^ハ惡^ハ給^ハひ^テ其^ハ情^ハ後^ハ母^ハ於^ハ根^ハ国^ハと^ハ有^ハし^ハ依^ハて
て其^ハ一^ハ事^ハ此^ハ依^ハて^ハ惡^ハ給^ハひ^テ其^ハ情^ハ後^ハ母^ハ於^ハ根^ハ国^ハと^ハ有^ハし^ハ依^ハて
二^ハ一^ハ書^ハ此^ハ神^ハ性^ハ惡^ハと^ハ有^ハし^ハ御^ハ行^ハ共^ハの^ハ出^ハ来^ハり^ハ書^ハし^ハ様^ハお^ハて
身^ハも^ハ弥^ハ立^ハつ^ハ計^ハり^ハ儲^ハ素^ハ戔^ハ嗚^ハ尊^ハの^ハ御^ハ母^ハ神^ハに^ハ從^ハ奉^ハる^ハせ
可^ハ畏^ハく^ハあ^ハむ^ハ思^ハゆ^ハる^ハ儲^ハ素^ハ戔^ハ嗚^ハ尊^ハの^ハ御^ハ母^ハ神^ハに^ハ從^ハ奉^ハる^ハせ

給ひて根国に就坐むと爲るや幽深き致有る事あり
其上引正書に二神共議曰吾已生大八洲国及山川草木
何不生生天下之王者歟於是共生日神云次生素戔鳴
尊と有る其日神此奇以始高天原也事依され奉る給へ
日神小坐せ八固より天上を治す可き神ありて
次あり生素戔鳴尊を受張たる天下之王者の渡りせ給
へる事右五百下小註る如し然れども此二神共御
父母二神の何不生天下之王者歟と宣ひて生奉るせ
給へる神何然に坐る日神奇異ある由有て天上を治すに就て天下
を素戔鳴尊小事依り奉るせ給へれば若然らずば天下

之王者ハ日神あり其も日神耳を生給ひて有る
如此く二神相並びて生坐る可治天下との御命の蒙坐りて御心ハ落居させ
給はざる事ころ有けり瑞珠盟約章に於是素戔鳴
尊請曰吾今奉教將就根国故欲暫向高天原共相見
而後永退矣勅許之乃昇詣之天也と有る是にて御父
大神に上天の事を願奉るせ給ふも勅許し給ふも
も故由有べきを其等の事追然に微細に記さる可き見區す可き
非以ハ此より力を盡して尋求む可き所にて非なる文
みハ有けれ古事記にも伊邪那岐大神大忌然詔
賜也と有て然者汝不可往此国乃神夜良比夜良比
の如く大く急うせ給へるを次み故於是速須佐之男

命言然者諸天照太御神將罷之有_レ其_レ右_レ如_レ新許之_レ云_レ事_レ之_レ無_レ天_レ須_レ佐_レ之_レ男_レ命_レ神_レ日_レ神_レ白_レ給_レ御_レ言_レ唯_レ大_レ御_レ神_レ之_レ年_レ以_レ云_レ云_レ大_レ御_レ神_レ詔_レ者云_レ故_レ以_レ為_レ諸_レ將_レ罷_レ往_レ之_レ狀_レ參_レ上_レ耳_レと有_レ不_レレ_レ何_レて御_レ父大_レ神_レの御_レ命_レある_レ若_レて天照太神_レと天安河_レの御_レ誓_レ坐_レて趣_レの所_レ見_レたり_レ其_レ御_レ誓_レの間_レ天忍_レ總_レ耳_レ尊_レを生_レ奉_レる_レせ給_レへる_レを天照太神_レ勅_レ日原_レ其_レ物_レ根_レ則_レ八坂_レ瓊_レ之_レ五百箇_レ御_レ統_レ者_レ是_レ吾_レ物也云_レ是_レ吾_レ兒_レ乃_レ取_レ而_レ子_レ養_レ為_レと有_レを室_レ開_レ始_レ章_レ第_レ三_レ一書_レあり_レ素_レ戔_レ鳴_レ尊_レの御_レ言_レ吾_レ以_レ清_レ心_レ所_レ生_レ兒_レ等_レ亦_レ奉_レ於_レ妙_レと見_レえ_レて其_レ結_レの有_レを通_レ證_レ日_レ神_レ猶_レ父_レ也_レ素_レ尊_レ猶_レ母也_レと云_レる_レ言_レあり_レ此_レは_レ不_レ生_レ天下_レ之_レ主_レ者_レ歟_レと宣_レひ_レて生成_レ奉_レ給_レへる_レ天照太神_レと素_レ戔_レ鳴_レ尊_レの御_レ中_レ生_レ出_レさ

乃參上天

なり又天孫降臨の時
不授賜へる三種神坐
の中やん八咫鏡天
照大神の御座あり
草薙劔素戔鳴
尊の御形あり此
等

世給へる天忍總耳尊_レ其_レ二柱_レの御_レ正_レ紆_レ不_レ渡_レる_レせ給_レて天地_レと日月_レと共_レ不_レ永_レく遠_レく天津_レ日_レ繼_レ所_レ知_レ者_レハ_レ理_レ此_レ不_レ定_レり_レて彼_レ伊_レ弉_レ諾_レ伊_レ弉_レ冉_レ二_レ神_レの御_レ言_レの結_レび又此_レ不_レ至_レて明_レる_レある_レ者_レあり_レ天孫_レ降_レ臨_レ章_レ第_レ一_レ一_レ書_レハ天照太神_レ曰_レ豊葦原_レ中国_レ是_レ吾_レ兒_レ可_レ王_レ之_レ地_レ也_レと宣_レひ_レ宝劔_レ出現_レ章_レ第_レ五_レ一_レ書_レハ素_レ戔_レ鳴_レ尊_レ曰_レ若_レ使_レ吾_レ兒_レ所_レ御_レ之_レ国_レ不_レ有_レ淳_レ宝_レ者_レ未_レ是_レ佳_レ也_レと有_レを以_レて掛_レ卷_レも甚_レも可_レ畏_レり皇_レ御_レ孫_レ尊_レの大_レ御_レ祖_レ不_レ渡_レる_レせ給_レふ事_レ此_レハ於_レて著_レ明_レく又_レ御_レ母_レ神_レの坐_レる_レ根_レ国_レの至_レる_レせ御_レ存_レ坐_レて其_レより日_レ詭_レ尊_レ之_レ即_レ其_レ国_レを所_レ知_レ者_レて日_レ神_レと相_レ共_レ此_レ天下_レの

○日本書紀傳十

○五百十三

晝夜を待分て守らせ給ふ大神ハ坐せハ御父母二神
の珍子ト宣ハせたる如く日神ハ垂てハ八百万千万
神の中ハ甚ク貴キ大神ハ坐すを古ク今ニ至る
道何の辨ヘも無ク惡神ノ如く貶シめ奉ルるあむ不
足遺憾シき事ありける此ハ正書ハ何不生天下之主
者歟ト有る事ヲ結明
あリば其神ノ御子ト誰レも此ハ素戔嗚尊ヲ以テ治ス天下ト也
と有ルを其神ノ御子ト誰レも此ハ素戔嗚尊ヲ以テ治ス天下ト也
天下を所治給へる事を訝ルる事ハ此傳を註す迄
ハ予ト虽も其列ハて有リる事ハ如此ニ説を得て傳
ハ卷ハかルるを猶モ又其心を弛シべしト儲室ハ劍出現章ハ素
とて今又再驚ラし置クるハむト遂到出雲之清地ニ乃言曰吾心
清シ之於彼處建宮ト有ハ八百神ト共ニ住シ給ハむ宮所

を定させ給へるあり其生坐ハ大己貴神ハ其御功業
を受継せ給へるも其本ハ出雲風土記ハ此大神を国
引坐ハ東水臣津野命ト申せるが二神ノ生給へる国
を彼此ハ引配りて地形を整給へる後の事ありハ此
大神ハ一トも国土經營の祖神ハ御在る事著明シ其高
天原より率て降給へる三女神を織幡神ト申して衣
服の事ハ御功坐る神あり又其五十猛神等三神ハ木
神ハ坐て家居の事ハ御功坐る神あり又国土ハて生
給へる大歳神ハ先農ノ事ハ御功坐して食物の神ハ
御在り坐て何レも不足ぬ事無ク御心足シハ如

此の政をたせ給ひて天下蒼生の恩類を蒙らせ給ひ
事即御父母二神の可以治天下也と事依り奉らせ給
へる任の滄海原潮之八百重を知し着す御事あり有
けぬ此の不治天下而常以啼泣恚恨と有りたれば
とて其の如く御母神の別奉らせ給へる為の慕れ
させ御在り坐す程の一事の御事ありて有りければ此
を以て天下を治さざる惡神とて口憚りて言も出難
き事ありむ有ける右の如く國體を正しく衣食住の
事を始定め給へるありむ彼修理固成是多陀用幣流之
國と云者あり有ける此の可治天下也と有りて天
下を御心の行く計り治り坐し

御事ありても鬱悒しき隈無る可し此大神を惡しき神
の如く云説の古人あり驚く可し先師あり驚く
可く説明する已くあり思定て一事あるが故の右の如
く説明する非ざるあり但出雲人の如く何の古書を
據る云掠むる類ひも亦惡む可し然る己か任奉る
神の如く私為るあり正しき人の○哭泣正書の出づ傳
為る事あり憤りて畏る可し○哭泣正書の出づ傳
八卷八十の恚恨の第二一書不恚と一字あるも同ト
く布都久年と訓べし傳九卷十三の汝何政恒啼如此
耶ハ古事記の何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知
流と有る漢文の切て被書たる者あり然れば其意を
得て汝波何故加母恒尔如此啼耶と訓べきあり何故
ハ記傳七三十四何由以ハ那尔登加母と訓べし孝徳

○日本書紀傳十

○五百十五

天皇五年御紀歌那本騰柯母于都俱之伊母我磨陀
左枳涅渠農と有る依り凡て難詞ハ奈尔志加母又
奈持比加又伊加尔叙ある數多有れば如何様も訓
べし今ハ其の中ハ古きハ依り又下の語勢も似たれ
ハあり又云れ又其下ハ何故上乗と有る何故を那持
又訓りたるハ依り又奈尔須礼曾と云も有り万葉
登母奈尔須礼曾波登布奈乃佐吉低已受初字と
見えて漢文ハ胡為又何為又易矣の字あるを然訓り
○欲從母於根国ハ古事記ハ僕者欲罷妣国根之堅
洲国故哭と有り儲此母於根国を旧くあり伊呂波能
美拳等能根国尔と訓るハ然る言あり伊呂波ハ母を

古事記ハ縮水
帝者爲此国而全
海原也と有る美
根国ハ入坐む
所思あり儲其

を親しめて云意の言ある由傳ハハ十ハ註ハハ十ハ註カ如ク
然此ハ根国ハ坐す母尊ハ奉從ハハ十ハ註と云義あり通證ハ別
於根国ハ訓る其ハてハ漢文訓ハ成て味氣無ハ儲伊
婦冊大神ハ現身ハて根国ハ坐せハ此ハ母と書ハた
其宜ハ古事記ハ妣字を書ハるハ礼曲礼生曰父曰母
死曰考曰妣と有る意ハて書ハれたるありめと當
ざり欲從ハ御母神ハ鎮穴祭詞ハ吾名妹命波上津国
宇所知食倍吾波下津国宇所知年と御自も宣ハ又古
事記ハ故号其伊邪那美命謂黄泉津大神とも見え
る如ク此地下ハ在る極遠之根国ハと其大神ハ所
知食す御国ハ一有けハ其御許ハ參て陪從ハ奉む
と申給へるハて上ハも註る如ク甚幼女ハ坐て別れ

奉るせ給ひふしうバ御年の已れ長させ御在り坐て
も猶其御心の止すして愈其御思の深く成りせさせ
給ふ此御子獨の御心耳あらず殊更に御母神の御
方あり御恩愛の御心深く御在り坐す可けぬ其方
あり戀慕いせ給へる御靈の即相副給へるおが有へ
りりける 儲如此慕奉りせ給ふ御子の御心へ更あり
我の心の心も推准して御母神の御心へ如何有けむ
心今道人の説さる事あり有れども然見奉りずて
心行き難け 儲此に欲後母於根國之有り已れ註せる
如く此素戔嗚尊素も天照太神と共小二柱の貴子
と為て伊弉諾伊弉册二神等相共を生奉りせ給ふ神に坐せ

此続きあり有れども上り此神を御身降り因て成
坐る由あり云るは固より傳の誤ある事此にて著く
む有ける又此に因て正書又第二一書あり此時の
事を父母二神に係て云るも僻傳ある事愈以て知ら
るるあり古くより此説あり甚く困りたりつて見え
て私記に問如此一書并古事記文者云く素戔嗚尊非
伊弉册尊之所生何故欲後母於根國哉答今如此一書
并古事記之文者非伊弉册尊之所生也但昔伊弉諾與
伊弉册共為夫婦素戔嗚尊繼非伊弉册之所生猶為伊
弉諾之子因其本約假云欲後母耳其實非母是明也是

頗難會文也と云ハ苦シげある説あり若此一書又
古事記の如く伊弉冉尊の神遊坐し後の伊弉諾尊の
御身滌し給へる時ハ生坐したる御母と云者
ハ非るあり其本約ハ因て假ハ欲從母ある言を設
て然申させ給ふ可き者ハ古人も會得難かり
故ハ如此く云道れたる者と所見たれば中々ある僻
見と云者ありク記傳七ハ此國ハ伊弉冉美
御子神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命
伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命
如伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命
昔伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命
の十柱神等も御稷伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命
り黄泉の穢惡と御稷伊弉冉神命ハ伊弉冉神命ハ伊弉冉神命

甲の日月神あり御稷の清き方ハ成坐し善神此須
佐之男命ハ惡臭の名殘消難き御鼻ハ成坐し殊ハ御
母の方ハ依り惡臭神あり故終ハ其國ハ歸坐し御
云の如シ云ハ皆強言あり穢と清と取合せて父母
の如シ云ハ善神と云ハ御眼也然ハ又稷佐之男命
清き方ハ依り善神と云ハ御眼也然ハ又稷佐之男命
を惡しき神と云ハ善神と云ハ御眼也然ハ又稷佐之男命
ありと云ハ善神と云ハ御眼也然ハ又稷佐之男命
く程を經問ハ御鼻の惡臭を洗滌ハ計の事ハ如何
て信ハ未坐したる今此を正し恥りて神も然耳ハ罪
の誤りたるを今此を正し恥りて神も然耳ハ罪
し給ふハ欲從母の後ハ章の對あり其ハ章ハ上ハ
り下ある人を誘引ハ義あるを從ハ下合せて下より
往て上ある人ハ合ハ事云あり天孫降臨章第一一
書ハ御伴神を從神と書きて美女登と訓せたるも從

○日本書紀傳十

○五百十八

ひて御許の在る謂ある可し第一書の乃使二神陪下
從天忌穗尊以降之あと有る從わて欲從母ハ御母神
の御許ハ陪從ハ奉せ給ハと申給へるわて天照
大神の御父大神ハ屬奉せ給ハ如く神隨ハ御事
とある伺奉り此ける御紀ハ順をも歸順をも服をも
布と訓る言義ハ一ハて其所の趣ハ依て書れ又志多我
俗ハ物を當合す事を阿氏我布と云ハ訓合ハ事を
阿良我布と云ハ委是ハあり從字ハ各義ハ我志多我布
又典理ハ又於布ハ又曾比ハ又字都須ハ又伎多留ハ又登安ハ
と猶ハ訓れ○唯ハ為ハ泣耳ハ御母神を感慕ハ奉せ給ハ
御心の表ハ出て泣せ御在ハ坐す事あり上ハ所見ハ
る如く御父伊弉諾大神す其御別を悲しませ給ハ

て則ハ匍匐頭邊ハ匍匐脚邊ハ哭泣流涕焉と有て終ハ
然後伊弉諾尊追伊弉冉尊入於黃泉と有る追ハ至る
せ給へる者を況て其御子として未ハ稚ハ程ハ別ハ奉
了せ給へる御心の遺ハ瀬ハ無くして永ハ泣ハ御在ハ
坐けむハ実ハ理ハ有ハける古ハ九ハて真心あり
うハ斯る事も何も少くも取繕ハて唯ハ有ハの隨ハ
哭も笑ハひハ言ハひハ語ハめハ為て甚ハ淨ハ清ハ御
風儀ある事此を以て曉ハ可ハ然るを第二書ハ此
記されたりけるこの心憂けれ子の母を慕ひて泣ハ
実ハ神隨ハ性ハ者ハて應ハ然る有ハる可き苦の事
ありハ此ハ一ハ事を以て性ハ惡ハと定ハ切ハ始ハ終ハ貫ハぬハ為
みて上ハ説ハる如き種の御功ハ如何ハとう為

○日本書紀傳十

○五百十九

る案ふハ漢籍ハ孟軻ト云ク者性善ト云ク者御ト云
者性惡を唱へて未落着ざる説あるガ此一書を傳へ
たりし人然る意を以て然書し置りし者多可ト後
漢華陀傳ハ爲入性惡難得意ト有る類を引て此ハ載
す可キ古事記ハ所見たる其神の天照太御神ハ白さ
せ給へる御言ハ僕者無邪心唯大御神之命以問賜僕
之矣伊佐知流之事故白都良久僕欲往妣国以哭尔大
御神詔汝者不可在此国而神夜良比夜良比賜故以爲
請將罷之狀參上耳ト有る此ハ清き御心有る事ハ
知る者悪神ハ何を以て定む可き但其御母
神を戀^泣注せ給ふ耳を御行と爲給へりし程ありけれ
ハ其爲ハ可以治天下ト依され奉給へる御命を等閑

ハ爲させ給へるガ故ハ其ハ就^記ハ国士ハ爲ハ人
民の爲ハ善ト云ケル事ハ出来又天警窟段^{あざの}御
荒^い有^らト云ケル皆反^ら様ハ後ハ善事ト云ケル成^れ
ハ如何ハ見ても此神性惡^{あり}ト説曲^ク可^き節無^き
者あるをや此ハ已^みト云^ふ事ハ有^らト云^ふ此神ハ
文者ハ誤^りト云^ふ事ハ年餘^{の間}世^ハ惡^しト云^ふ神^ハ正^しト云^ふ
得^居事^ハの慣^らト云^ふ事^ハ如^く再^ハ比^ハ註^す者^ハあり
○伊弉諾尊惡^之曰^ハ上^ハ伊弉諾尊既^還乃^追悔曰^吾
前^到於^不須^也凶^目汚^穢之^處云^々宣^ひて其^往坐^し
事^をさ^へ悔^給へ^る計^の国^{あり}然^るを^其国^ハ罷^り
て母^尊ハ從^ハむと申^{させ}給^へるを^惡ませ給^へるハ

て其と申すも素戔鳴尊を怒りて奉らせ給へりか
故あり第十一書に但親見泉国此既不祥と有る如き
国ありけり御許を放ちて其地を遣給はむ事を限
無く後目痛からせ給ひて止させ給へりけむを如何
ありても其御心の押へ難うりし故に悪ませ給へり
あり古事記に其御子の生坐し時あり此時伊邪那岐
命大歡喜詔吾者生子而於生終得由貴子と有る此
時あり伊邪那岐大神大忿怒詔然者汝不可住此国
乃神夜良比夜良比賜也と有て其反あるを思ふ可
し凡て神の御心は甚し奇しき者あり上も云る如
く天下の馬はくも月夜見尊の角馬あり弘く云る如

△前記第四十五
詔天地も神也
受君も捨不給天
と並云るを考ふ
可

者あるを続後紀に其神の御崇めて牛馬の多く斃
る事有り古語拾遺に御歳神の崇給ひて墮を放ち
て苗稼を損給へる事有る其守給ふ及なり又其を
害給ふ事も有る如く其愛ありしに引替りて悪く思
ふあり成ぬ悪の好の對あり然るに好と云は寄見為と
云事おて彼方ある物をも此に引寄せ見る意ありて
万葉六丁に如是爲管在久字好曾又二十丁高所知者
山河字吉三と云類是あり悪ハ名義抄に此字ハ美
奴久斯と云ふ一訓有り此に就て思ふに抽見の義ハ
て多在る中より其一を抜出て眼を著る由に聞えり
の神武天皇御紀に賊虜所據皆是要害之地故道路絶
塞無處可通天皇惡之と有る其あり又此を迹久斯と

統紀第四十五話
不汝悉亦不能
不見人好改又立
年事方心乃麻尔府
其命彼之有る
是其例あり

語之成あり万葉一紫草能尔保故美妹字尔苦久有
者七荒磯超浪者昭然為蟹海之玉藻之憎者不有手
八不惡君字何時往而早將見十吾社葉憎毛有目
云十一小夜哉將問二八十一不在国又争者神毛惡
為繼八師世割流君之惡有莫国又繼毛依十方憎不有
君あど有る皆好又愛の反小用へるあり漢籍大学の
好而知其惡惡而知其美○任情ハ情能麻尔ハ訓
云云て其反對へるあり
ハ一古事記ハ隨依賜之命所知者又此葦原中国者隨
天神御子之命歟云云隨天神御子之命勿違白訖云云
僕子等二神隨百僕之不違此葦原中国者隨命既歟也
云云故隨言依賜降生而知者と見え統紀第一詔ハ天
坐神之依之奉之隨第五詔ハ吾孫將知食国天下此
與佐斯奉志麻尔麻尔第十四詔ハ言依奉乃隨命と有

然此ハ麻尔身任
中事ハ心任す
意ある可ク麻尔ハ
身任中事ハ心
の任中事ハ心
コト

り其第廿三詔ハ食国天下事依奉乃任命と有分任
を麻尔麻尔と訓む證ありける万葉ハ多く隨とも隨
意とも任意とも作きて麻尔麻尔とも麻尔麻尔とも訓
せたり然此ハ心任せて母尊の根国ハ御在し坐せ
と争つたさせ給はざる言あり又此麻尔ハ云云事有
り万葉十八ハ於保伎見能未伎能麻尔ハ云云有る
又大王乃麻尔能麻尔久と詠は是ハ麻尔ハ云云有る
義あり二ハ皇子隨任賜者四ハ大王乃任乃隨意あり
云云任ハ官ハ任事を麻尔ハ云云自然あり然此ハ麻尔
云云人爲あるを麻尔ハ云云ありけり傳七太占の下ハ
云云事共ハ○可行を伊祢と訓るハ実ハ然る可ク同
卜行字あかき由久と云ハ歸の對わて我方を本ハ為

たる言あり伊奴と云ハ此を去るが云言めて彼方を
主と為たるあり此ハ素戔嗚尊の情の任ハ彼国ハ赴
本坐ハ此顯国ハ歸らせ給ふ事を期らせ給ハされ
ハ伊奴ハて允ハ當ハり大被詞ハ罪咎の除てり亡る
狀を瀨織津比咩止云神大海原ハ持出武奈如此持出往
没と有ハ歸來る者ありさハ往てハ云るあり万葉
五八下ハ出波之利伊奈ハ等思騰許良ハ佐夜利奴十
一十八ハ赤裳下引去之儀乎十二ニ下ハ鬢鬚所見而
往之子政ハ又ハ三十京師邊君者本之字あり多ク由久
奴ハ右ハ斯る違ハ有るを五畿内より西あり國ハ人
てハ右ハ定ハ如くありて古書ハ合るを山東ありてハ人

の許至るをハ我家ハ歸るを共ハ由久ハ云て伊奴
と云詞無ク却て京師方ハ人ハ正ハく伊奴ハ云
を笑むハ其中外を取
違へたる者無ハ○逐之ハ古事記ハ神夜良比ハ
夜良比賜也と有を切たる者あり然れども宝鏡開始
章ハ逐降鳥を神夜良比ハ夜良比伎ハ古ハ訓るを以
思ハハ此も然訓へくも思ゆれども其訓ハ其所ハ讓
て此の逐之ハ夜良比賜伎ハ訓へハ記傳七ニ下ハ夜
良布ハ本夜流を延たる言ハて逐ハ今俗ハ云ハ追放
あり諸ハ有ハ然る言あり備宝鏡開始音第一一書ハ
逐之此ハ波羅賦と有を記傳ハ波ハ夜の誤ハて夜羅
賦あり可ハ云ハなる事ハの信ハハハ大被詞ハ大

川道^云持退出^云被却止宣^と見え御門祭詞^も待防
掃却言排坐^云有^と被^と重云^を以て見^此逐
ハ遣^ハ被^ハ異^ハ事云^も更^ハ有^リ追^ハ難^を於^夜
式^ハ載^ル波^ハ里^ノ外^ハ穢^久惡^伎疫^鬼能^所村^ハ藏^里
隱^布苗^波里^ノ外^ハ穢^久惡^伎疫^鬼能^所村^ハ藏^里
年^多知^疫鬼^之住^加登^定賜^此行^給氏^云有^も疫^鬼
を^追放^す事^ハ此^ノ逐^之事^ハ專^一有^者有^リ
此^上五^百七^十八^束髯^佐須^良比^咩止^云神^持佐
逐^ハ此^御在^一坐^三義^有又^上三百^七十^七カ註^ス如^ク此
神^ノ和^魂ハ^一土^藏靈^貴坐^す速^佐須^良比^咩神^也
大^被詞^ハ根^国底^之国^也坐^速佐^須良^比咩^止云^神持^佐
須^良比^咩年^二有^カ如^ク罪^咎を^流離^スハ^一失^ハ神^ハ

神^行ハ坐^セ也^も其^始此^{大神}共^ハ流^離ハ^一此^サセ
給^ハ意^ノ御^名何^也此^ノ神^逐ハ起^ル御^名
有^リ可^一但^夜良^布佐^須良^布ハ^一意^ハ相^近け^レ
云^ハ佐^須良^布ハ^一其^被却^ル方^を主^ト
夜^良比^尔夜^良比^賜也^ノ文^ハ統^テ故^其伊^邪那^岐大^神
者^坐淡^海之^多賀^也有^リ然^ラ此^神逐^ノ大^御政^ハ
此^多賀^宮ハ^一行^ハせ^サ給^ハハ^一カ^リけ^レ神^也
名^式ハ^一近^江国^大上^郡多^何神^社二^座有^リ是^ハ其^也
一^座ハ^一伊^弉冉^尊有^リ可^キ事^甲也^も更^ハ有^リ斯^レハ^一伊
弉^冉尊^ノ末^躰国^ハ在^一時^ナり^共ハ^一住^セ給^ハハ^一

宮都にて有し者と所見たり知名故小大上郡田可御
有り並びて神戸又高宮と云二郷も其多何神社と就
て号めたる者と聞えたり借郡名を大上と有ハ借字
ハて素戔嗚尊の此ハて神
逐ハれ坐し由ハ依ハる伊又万葉四ハ淡海路乃鳥
籠之山有不知武川と有也伊弉諾尊の御名ハ依ハる
ハハ非ハる又野洲郡と云モ天安河の秋を移させ給
ハるハるハるハる伊查郡ハ万葉十三ハ韋後枚出而伊
香胡山と有ハる又伊吹山と云モ此第六一書ハ吹捲之氣
化爲神云ハる又田又神名式ハ淡路国津名郡淡路伊佐
縁ハ有ハる又田又神名式ハ淡路国津名郡淡路伊佐
奈伎神社大名神と見えたり此を大同類聚方ハ伊母藥
私云淡路多賀社祝等所傳と云又淡路藥一云波多遣
久須利
新羅之使臣波多朝臣廣定之方也と有を神異方ハ

名
△行方郡多珂神社
大
神
之
有
也

多賀社祝等之方也と見え今も多賀村と云ハ立せ御
在し坐す事瑞珠盟約章ハ就て云るガ如し又陸奥国
宮城郡多賀神社ハ知名故ハ多賀郷有ハる地名ハ依
ハるハると思ハル凡士記ハ多賀社所祭伊弉諾尊也雄
略天皇二年始行神礼式祭之見えたり斯ハ伊弉諾大神を祀
祭ハる社を多賀神社と申す事と所見たり此ハ就て
各国ハ戒ハるハ遠江国鹿玉郡多賀神社陸奥国名取郡
多加神社和名故ハ多珂郷有ハる此二社を同神と見
ハる會津郡伊佐須美神社大名神瑯磨郡磐橋神社ハ有
之ハ考ハるハ如何ハる故由有ハる事あり然ハ知

△たりの万葉三巻
渡山を詠る小册神
之貴山御美と訓
るを以知へ

名取の宮城郡又宮城郷の有も二神又此所の宮城
を定めて御在し坐けむを京より程隔此の国の事か
し有けぬ其古傳を物の書し置ざりけむうる己不
之へぬし者ある可し但此ハ餘りある推量の説と思
己の引る如く其国人の著せり會津風土記と云書
の伊佐須美大明神社在高田村今在大沼郡明神嶽此
神初現之地也鎮明御宇移于此古來神殿有伊弉諾尊
伊弉冉尊立像一木刻三尊云其高田村ハ多賀
り出たる可く明神嶽ハ二神嶽と云けむを後明神
の作るより字音ハ呼習けむと所思え又磐梯神社
傳六卷天浮橋の下引了會津山水記ハ會津鎮
磐梯築高五百十弓廻麓九十余里在城東北十五里頂
上建祠鳥有を奥羽觀跡聞老志ハ神像男體長一尺
六寸女體長一尺五寸有也志ハ神の狀あり和名
抄ハ載され此也其地を稲城郷と云神都也
由有る事あり此等を合せ考ふれば二神の神都も示

陸奥国に在つる事も有しありけり但其本宮ハ一も
素より八尋殿あり事申すも更あるが右の近江国又
陸奥国のも有り又大和国を以ても宮所と定め御在
し坐つと所思る由有て己の云を其ハ神武天皇
三十一一年御紀傳然此大神を多賀神と申せる賀を清
小具の註す可し然此大神を多賀神と申せる賀を清
て加の如く唱ふる事鴨を賀茂と書く例めて好字を
祝用たる者あり儲多賀神と申奉るハ天照太神素戔
鳴尊あどの御父と坐し八百万千万神の御祖の坐て
か故の高神と稱奉りし者あり其ハ古事記須佐之
男命の天照太御神の白給ふ御言ハ唯大御神之命以
云々之伊邪那岐大神の御名を指さして申給へるが
如く又祝詞ハ高皇產靈尊神皇產靈尊の御名を云

ずして神漏岐命神漏美命と申せる状にて諸神の御
祖して最貴く御在るを以て高神といひ申奉りし由て
言義ハ尊神又貴神の意ある可し名義枚ハ尊をも貴
之多布登志とも多加志とも訓て其同義あるハ更あ
り統紀第一詔ハ貴支高支廣支厚支第六詔ハ高支貴
支行尔依而あや重云るあやを以て曉る可し然以ハ
高神と称奉りし事ハ其御子神等ハ然申給へるよ
り出来しる事決き者あり又瑞珠盟約章ある登天報
命の事ハ依て日之方宮ハ由坐す由ハ依て高神と云
義をも兼たる可し天を高と云事已ハ傳四九下云

り備又外宮ある多賀宮を高宮とも云て同ト義ある
こて然申せるあやも天照皇太神の和魂ハ坐故ハ尊
己ハ上ある直日神の下ハ云り 備右の近江の多何神
社を叙ハ引る私記ハ日之方宮是東北方之地少陽之
宮即近江国大上郡多賀之宮正值此方是近江之宮也
非謂在天上也云る如く古ハも然る邪説の有し
ら人皆惑ひ居る事あはれども然るハ近江国の何處ハ
皇祖天神の坐を指て復命ハハ參給へるり又東北方
の地此方^ハを求むとあはれ右の陸奥国ハハ三處ハ坐
此ハ其も正しく此方ハ値るを何と云む餘りあり
けり妄説あり備大同美聚方ハ多賀藥伊特諾尊方也

と有る此社を云あり神祇官承方記ハ田河社と書
て此多何神社を日之次宮と云事ハ何れの古書ハも
且ても云ハざ事あり傳十瑞珠盟約章ハ就て云
へし同郡日向神社有り上あり筑紫日向ハ幸坐し所
由を思ハ可く又山田神社有り大同姜聚方ハ大上葉
近江國山田里民間等之所傳原者素多鳴尊所投方也
と有る其此を合せ見れば伊弉諾大神橋之小門ハ御
身滌より後の宮所ハしも此近江國ハ在て其間ハ素
多鳴尊を神逐ひ小逐ハせ給ハ事ハ有し故ハ古事記
ハ右の如く故其伊弉那伊弉岐大神者坐淡海之多賀也

とハ傳ハりたる者あり若て瑞珠盟約章ハ素多鳴
尊昇天の後ハ構幽宮於淡路之洲寂然長隱者矣と有
る是ハて其次序実ハ正しく整ハて其條理甚ハ分明
しき者あり然れば幽宮を淡路之洲ハ構ハせ給ハる
ハ畢給ハて天上ハ復命ハ給ハむ御心構ハて其初
ハ天ヲ給ハて八尋殿を化作給ハり其本國ハ歸
ハ彼天神ハ詔命を負持て天降ハせ給ハる其始
ハ結ハて成れるあり奇ハとも重ハとも云知ず貴く可
ハ者ハ御事ハ

右安政二乙卯年三月十五日始之干時疾病也僅三張而
 止為八月十五日得少快復記身而無牛慮而一得也於是
 始知有障礙之思妖鬼之有妨而攷之而力之力而無息而助精八于神復漸思有神明之有助為
 然及殺黃泉之章也或疾病或福千輻万湊無所遁也吾
 唯以為典書亡耶典通亡耶守死而書無措筆為竟十日二日以有地震之變也
 棟宇顛落忽以為泉下之鬼地裂水溢人叫火然不知所如
 唯得天墜以降地靈以護神助毒子亦出焉僅得出焉其艱苦不可言也蓋將有去泉門而禳
 日向之慶而十二月七日大灘光憲等遣宮野直勝訪予第
 亭為快然自足益力之竟終此業於官戶河之東畔僑居時

十二月廿三日也通計五百三十一張也三張而病二百
 九十五張而災於此書也為天下後世福慶無疆者矣

